「資本」概念の言語的解剖

── 重層的意味構造の実践的研究 ──

鈴　木　一　存

序論

資本主義の根幹をなす「資本」概念は、古来経済学を中心に各方面から様々な検討が加えられてきた。それらの考察はどれも精緻を極めたものであるといってよく、マルクスの『資本論』をはじめとする伝統的明察は、一見するとすでに完成の域に達したものであるかのようにも見受けられるほどである。一方で、「資本」概念解釈の意味論的検証が試みられることは、管見の限り見当たらなかった。概念分析を完成させる最後の仕上げとして、意味論的検証は不可欠である。

本論文[1)]では、「資本」概念を指示する英語 capital とドイツ語 Kapital およびその同語源語・類義語の織り成す意味の重層的ネットワーク構造について、意味の多様化現象の英独比較を兼ねつつ言語横断的に分析し、古典ラテン語期の原義「頭」にまで遡りつつ、現在の「資本」の語義を表すに至った経緯を考える。具体的には、原義が現在の「資本」という語義に与えた影響の有無、および「資本」概念が英語 capital およびドイツ語 Kapital という語によって指示される決定要因を考察する。そして、現在の「資本」概念の意味が複雑化した要因について、意味理論を適宜援用しつつ可能な範囲で推論することを試みる。

先行研究の概観

「資本」概念は、従来の経済学研究史上で、家畜や牧畜文化と結びつけられて考察されてきた。例えば、Schneider（1981）・Spencer（1990）・太田（2002）などは、アフリカにおける「資本」概念と家畜・牧畜文化との密接な関係性を指摘している。また、中川（2017ab）はインド・ヨーロッパ語族の原初的生業体系の中心に牧畜文化があったということを指摘した上で、印欧語族の社会経済体制の構造から近現代の資本主義経済下の社会体制の構造に至るまで、その牧畜文化特有のヒエラルキー構造によって秩序化されているということを指摘している。カール・マルクスの『資本論』では、「資本」概念を有機的生命体になぞらえてメタフォリカルに表現しているということがしばしば見受けられる。

従来、「資本」という概念と家畜・牧畜文化とを結びつける有機的考察は、あくまでも経済学の範囲内にとどまっていた。言語的側面から「資本」概念を分析した貴重な先行研究である Hohoff（1918）・Laum（1954）も経済学的な分析スタイルが色濃く残るものであるため、「資

本」概念に関連する各意義間の有機的連関の指摘が不十分であり、当該概念の意味論的分析の粒度を高くする必要がある。よって、本研究では、「資本」概念を指示する語彙の意味の経緯を紐解き、「資本」概念の原型と「家畜」という意味との関連性について意味論的側面からの検証を試みる。先行研究の提示する意味の経路の解釈は、断片的には観察されるものの、その体系の全体像が明瞭に提示されているとは言い難い。こうした先行研究において萌芽的に提示された意味経路の解釈は、意味論的に成立しうるのかを検証する。Hohoff（1918）・Laum（1954）などの「資本」概念の言語的側面の分析を含む先行研究を適宜参照しつつ、その言語学的整理・意味論的検証・意味理論を応用した分析の精緻化を試みる。

続いて、本論文で取り扱うテーマに直接関連する言語学上の先行研究について言及しておく。本論文では、「資本」概念を指示する語およびその関連語彙に関して、その多様化する意味の重層的なネットワーク構造を実践的に分析する。多義ネットワークの代表的研究である瀬戸（2007）の分析手法に則って、当該語彙の意味を分析する。また、メタファー・メトニミー・シネクドキなどの比喩類型に由来する、辞書に記載のある語彙的に定着した規範的意味の間に生じる多義類型を分析基準とし、文以上のレベルで発生する臨時的用法の比喩は取り扱わない[2)]。この点についても、瀬戸（2007）の分析手法と一致する。

瀬戸（2007）の分析手法と本論文の分析方針の主な相違点は次の 2 点に集約される。第一に、瀬戸（2007）などの従来の多義研究は、その研究テーマ自体の性質に制約を受け、自ずから各多義語内の意味分析にとどまる。本研究では、必要に応じて、同語源語間や類義語間などにおける語の枠組みを超えた意味分析をも遂行する。第二に、瀬戸（2007）などの従来の多義研究では、分類の精緻化を図って峻別を究めた結果、各多義語毎に最も説得力のある意味の経路が精選されるという目覚ましい研究成果を挙げた一方、複数の可能経路は考慮されておらず、複合的な意味構造の一部が反映されていない可能性は否定できない。本研究では、意味の経路を統一的に断定することを目的とはせず、常に複数の可能な意味の経路を想定する。本論文の分析では、従来の分析手法に関する以上の制約を取り払い、より広い視野から意味の多様化現象の重層的ネットワーク構造をとらえ直すことを企図する。

「資本」概念を指示する語の意味経路についての言語的考察

「頭（の）」という意味を原義として表す capital という語が、「資本（の）」という語義をも表すようになる契機とは何か。両語義には一見すると懸隔があるゆえ、顕在的に表出するか潜在的に含意されるかの別に関わらず、同一の語によって指示される両語義は第三の意味を媒介していると考えることが自然である。

多義化ないし意味の変化の経緯に関しては、明示的な解釈が可能であるとは必ずしも限らない。意味は、無数の有機的連絡の潜在的可能性を秘めた複線的かつ複合的な構造をしている。そのため、意味の発展経緯は、幾通りかの経路を想定することによって、複数の可能経路が複線的に推

論される必要がある場合もある。

本研究では、「資本」概念を意味する英語 capital およびそのドイツ語における相当語 Kapital の意味の媒介過程に関して複数の経路の可能性を提示し、時として経済学上の諸言説の内容と照らし合わせながらその整合性を検討する。なお、上述の通り、本来意味の経路は複線的であるが、複線的経路を総体的に説明することはかえって理解の妨げとなってしまう恐れもあるため、以下では可能な限り単線的な経路に分割しつつ意味の経緯を説明する。

多義や意味変化などの意味の多様化現象は、多くの場合、各語によって明示的に包含される、辞書に記載されるような規範的な意味が有機化したものである。しかし、他方で、当該現象は、必ずしもそうした規範的な意味の有機的関係性という明示的な要素のみによって構成されているとは限らない。本論文では、英語 capital およびドイツ語 Kapital という語によって明示的に包含される、辞書に記載されるような規範的な意味を最大限経路推定の構成要素としつつも、推論可能な他の意味の要素も考慮に入れる。

なお、英語語彙には capital が名詞と形容詞の両方の品詞として存在する。むろんこれら両方の品詞の capital は語源[3]的に同一である。語源的に同一である語の間の品詞を超越した意味の連続性は、意味のネットワークを分析するにあたって尊重されなければならない。例えば、瀬戸（2007）は、品詞横断的な意味分析を体系的に遂行することによって生まれた意味研究の成果である。加えて、このケースでは、品詞の差異が意味の変遷に直接的な影響を与えることは考えにくい。実際、OED（2022）や寺澤（1997）などの各種英語辞典類の記述では、capital の名詞と形容詞の各語義が一つの見出し語（lemma）項目にまとめられている。以降は瀬戸（2007）にならい、名詞と形容詞の相当する意味どうしをまとめる品詞横断的な意味分析を試みる。

英語語彙 capital という語は元来ラテン語語彙 capitālis に由来するものである。capitālis の名詞形 caput の指示する意味が古典ラテン語期に既に多様化していた場合、意味の通時的分析の時代的対象範囲は古典ラテン語期のみになる。古典ラテン文学作品は、主要作者の推定存命年代に限っていえば前 1 世紀から後 2 世紀に集中しており[4]、これを言語資料として用いて通時的分析の基盤とするには、文献年代分布のヴァリエーションがやや乏しいと考えられる。こうした研究環境下では、各語義の歴史的出現順序を精密に分析する厳密な通時的研究に先立ち、意味の開かれた可能世界の体系を探究しておくこともまた研究に価するはずである。本研究は、言語的な認識・思考過程における時間的連続性[5]に沿って多様化する意味の全体像を、Zalizniak et al.（2012）などと同様に、通時的要素と共時的要素の両方によって構成される意味の多様化現象として追究する[6]。すなわち、OED（2022）や寺澤（1997）などの通時的分析の成果[7]を可能な限り分析枠組みの基盤としつつ、メタファー・メトニミー・シネクドキといった比喩に由来する多義類型によって構成される共時的多義分析の観点をとり入れ、それらの類型による暫定的分類を通して、複雑多岐にわたる重層的な意味経路を整理することを試みる。なお、本論文で意味経路内の意味の多様化の各要素の分類に使用する各多義類型の定義を予め示しておく。本論文で取り扱う多義類型は、メタファー・メトニミー・シネクドキの三種類である。メタファーに関しては、

基本的に瀬戸（2007: 5f.）の定義に従い、形態や機能などの類似性に基づいて意味が多様化していると考えられるものをメタファーに分類する。本論文におけるメトニミーは、近接性に基づく意味の多様化を指す。近接性とは、基本的には現実世界における物理的連続性に等しい[8)]。ただし、本論文におけるメトニミーの基盤は、瀬戸（2007）・Seto（1999）などとは異なり、思考における心理的近接性をもメトニミーの基盤とする[9)]。本論文におけるシネクドキは、カテゴリー関係に基づく類と種の間の意味の多様化を指す[10)]。この意味でのシネクドキは、通時的観点からいえば、意味の一般化と特殊化のいずれかにも該当するものである[11)]。

経路１：語義「主要な」を媒介する英語 capital の意味変遷過程の想定経路

「頭（の）」という原義から「資本（の）」という意味に至る英語 capital の意味の経路として、第一に、そして最も容易に考えられるのは、形容詞および名詞の capital が指示する語義のみによって構成される想定経路であろう。以下では、「頭（の）」[12)]という語義から「重大な」[13)]・「致命的な」[14)]・「主要な」[15)]・「主要な金銭」[16)]（すなわち「資本金」）という語義を経て「資本（の）」[17)]という語義へと単線的に変化する想定経路を検討する[18)]。

この想定経路の最初の段階では、「頭（の）」という、仮に負傷すれば人間の生死に直接的に関わる身体部分を指示する具体的な意味から、仮に欠ければ対象一般の成立に直接的に関わる部分や要素を指示する「重大な（こと）」・「致命的な（こと）」という抽象的な意味へと変化し、同一カテゴリーの内部で意味が一般化したといえる。以降本論文では、Seto（1999）などの先行研究の理論的見解に基づき、カテゴリー関係に基づく一般化ないし特殊化であるこの意味変遷過程をシネクドキ的意味変遷過程と呼ぶ。

次の意味変遷の段階で、「重大な（こと）」・「致命的な（こと）」という意味から「主要な（もの）」という意味へと変遷する経路が想定される。両義は同じカテゴリーに属するわけではなく、同じ評価尺度に属しており、その評価尺度のレベルに相違がある。「主要な（もの）」という意味は、「重大な（こと）」・「致命的な（こと）」という意味に含まれていた存立の危険性を示す要素が後退しており、評価尺度の程度が低下していると解釈することが可能である。本稿では、この意味変遷過程を、心理レベルのグラデーションにおける近接性に基づくメトニミー的意味変遷過程と呼ぶ[19)]。

次の段階では、対象一般の重要な部分を指す「主要な（もの）」という抽象的な語義から、「主要な金銭」（すなわち「資本金」）という具体的な語義へと変遷する経路が想定される。この意味変遷過程は、同一カテゴリーの内部で意味が特殊化したと解釈することも可能である。よって、カテゴリー関係に基づく特殊化であるこの意味変遷過程をシネクドキ的意味変遷過程と呼ぶ。

「主要な金銭」（すなわち「資本金」）という意味から「資本」という語義へと至る意味経路の最後の段階を考察する。利殖の機構とも呼ぶべき「資本」には、機械や農産物など「金銭」以外にもあらゆる種類のものが含まれる。よって、「金銭」は「資本」の一形態である。したがって、

「金銭」という意味から「資本」という意味となるのは、カテゴリー関係に基づくシネクドキ的意味変遷過程を通した意味の一般化と考えることができる。「金銭」と、農産物・機械・家畜等のその他の種類の「資本」は、利殖という機能を共有している。意味の間において等しい性質が共通していることこそシネクドキの成立条件である。

以上の意味の想定経路を総合すると、図1のようになる。

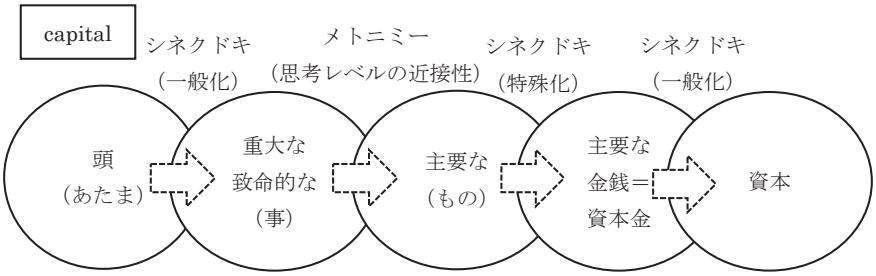

図1　語義「主要な」を媒介する英語 capital の意味変遷過程

古典ラテン語期から存在する capitālis の名詞形 caput も、上記の図示された意味の多様化の経路において意味的な結節点となる「頭」[20]「主要なもの」[21]「資本（金）」[22]という語義を指示していた。よって、上記の意味の多様化の経路は、既に古典ラテン語期に caput という語の意味において形成されていた可能性が浮上する。

「主要な（もの）」という意味から「元金（の）」という意味へと多様化する過程は、英語では他に principal の語義においても観察される[23]。英語語彙においては、capital や principal の他に、stock という語の意味も、「主要な」という意味を媒介して「資本金」という語義へと至る、同様の意味の経路をとる可能性がある[24]。「資本金」[25]という語義などを指示する stock は、古くから「木の幹」[26]という語義を指示しており、この語義から形態上の類似性[27]に基づいて「人間の胴体」[28]という語義が派生していると考えられる[29]。「木の幹」と「人間の胴体」は、それぞれの生命にとって「主要な」部分である。また、stock は「貯蔵」という意味も表す[30]。自明ではあるが、「貯蔵」とは、その貯蔵する者にとって重要なものを貯めることである。このように、stock は「資本金」という語義を指示すると同時に、「主要な」という意味へと結びつく可能性のある語義を複数指示している。

同様の意味の多様化の経路は、フランス語の語彙 capital にも反映されている。フランス語語彙の通時的意味変遷過程を記述した Alain Rey による『フランス語歴史辞典』（Dictionnaire Historique de la langue française）には、capital に関して次のような記述がある。それによれば、フランス語語彙における形容詞 capital の意味は、ラテン語の caput「頭」から派生した capitālis の「頭部に関係する」という 1200 年頃に確認された本来の意味から、1255 年頃に観察される「頭部を犠牲にする可能性がある」という法的意味へと発展し、さらにそこから 1389 年に「重要

な、不可欠な」という一般的な意味の比喩的用法が生じるなど、英語語彙における形容詞 capital と同様の意味の変遷をたどった[31]。フランス語における形容詞 capital は名詞化し、「物事の本質的な部分」を意味するようになるなど、英語における capital が「主要な（もの）」という意味を表すようになる一連の過程と同様の経過をたどっている[32]。1567年以降、経済学において「財産をなすこと」という名詞的意味が確認されて以後、フランス語語彙 capital は「負債の元本」次いで「年金の元本」を意味し、1606年からは「商売に利用する金額」、1767年からは複数形の capitaux で「流通しているすべての金額、利用可能な価値」をも意味するようになったという一連の意味変遷過程も、英語語彙における capital の過程と一致している[33]。

同様の意味の多様化の経路は、ドイツ語の語彙にも反映されている。新高ドイツ語における Kapital の指示する意味は、古くは後期中高ドイツ語期に houbetgelt（または houbetsumme ないし houbetguot）と表されていた[34]。これらの語の各要素を仮に新高ドイツ語に置き換えるならば、それぞれ ‚Hauptgeld‘（または ‚Hauptsumme‘ ないし ‚Hauptgut‘）となる。houbet ないし Haupt は「頭」という意味を中心に指示する語であり、後続する名詞と結びついて複合名詞化すると、「主要な」といった意味を表す。Julius Pokorny の『印欧語語源辞典』（Indogermanisches etymologisches Wörterbuch）にも記述されているように、新高ドイツ語における Haupt（およびその古高ドイツ語期の相当語 houbit）は、印欧語根 *kaput に起源があり、同語根に由来するラテン語 caput と同語源である[35]。つまり、ラテン語名詞 caput に由来する英語語彙 capital と、その caput と同語源である中高ドイツ語名詞 houbet およびその継承語である新高ドイツ語名詞 Haupt は、「頭（の）」という意味から「主要な（もの）」という意味への変遷過程を共有している。gelt（nhd. Geld）は「金銭」、summe（nhd. Summe）は「総額」、guot（nhd. Gut）は「財」という意味をそれぞれ指示する。語全体としては、「主要な」「金銭」（ないし「財」）という意味を表しており、「資本」としての「元金」という意味に等しい。

「資本」概念を意味する語として capital を用いる必然性を考えてみたい。「重大な（こと）」・「致命的な（こと）」・「主要な（もの）」という意味を指示できる語であれば、「資本」概念をも多義的に意味する語となる潜在的可能性を有する。この観点だけを考慮するならば、capital 以外の語でも十分に代替可能であり、capital という語を用いて「資本」概念を指示する必然性に疑念が生じる。動物の「心臓」などを意味する heart や、植物の実などの「核」などを意味する core なども、この条件を満たすであろう。複合的な概念を端的に表現する語の選択は、無意識的に遂行されることはあっても、無意味な無作為的感覚に依拠したものでは決してない。語の選択には、表現者の表現を最適化しようとする目的意識が常に潜在する。その他の選択可能性を排除し、それぞれの語が選択された理由がなければ、その言説全体の根幹を形成する概念の基盤が恣意的であるということになってしまう[36]。

多義や意味変化などの意味の多様化現象を分析する際に我々が陥りがちであるイドラの一つとして、任意の語句に備わっている意味のリストという収束する意味体系の中の関係性を明確化することに集中するあまり、その他の視座が必要以上に棄却されてしまうということがしばしば生

じる。包括的な意味分析には、発散する意味の想像力による無数の命名可能性を考慮し、対象概念の他の語による表現可能性を確認しておかなければならない。翻って、こうした他の潜在的可能性よりも優先される、特定の語へと収斂した決定要因を追究することこそ、意味の多様化現象を包括的に究明する上で重要ではないだろうか。以下では、「資本」を指示する語が、「頭（あたま）（の）」という原義を起源とする capital でなければならない理由を探る。

経路 2：ラテン語 caput から中世ラテン語 capitāle を経由して ドイツ語 Kapital へと至る意味変遷過程の想定経路

英語 capital の原義「頭（あたま）（の）」の起源は、そのラテン語 capitālis の名詞形 caput にまで遡ることができる。ラテン語においては、caput の形容詞形である capitālis が多くの場合 vīta の形容詞形である vītālis と同等の意味を指示するなど、頭部が生命を代表すると考えられていた[37]。生命にとって重要な頭部は、体全体を代表する主要な部分である[38]。頭部を有する生物を数える場合、部分が全体を代表する pars pro toto という原理が作用し、（当該生物の体全体というよりも）当該生物の体を代表する主要部分である頭部によって数えられる[39]。capital の原義「頭（あたま）（の）」に密接に関連する「頭（とう）（＝頭数）」[40]という語義が、ラテン語の名詞 caput には存在していた[41]。Küspert（1903: 39）によれば、「頭（あたま）」という意味から ‚das Stück‘「頭（とう）」[42]という意味へとメトニミー的に変化したという。‚das Stück‘ は元来「全体の一部」（ein abgetrennter Teil eines Ganzen）という意味から出発している[43]。つまり、caput が ‚das Stück‘ という意味で用いられる時には、常に全体との関係性である部分全体関係が意識されるということである。これについては、Lewis & Short（1879: 289f.）にも同様の記述があり、意味の多様化の経路は部分全体関係（pars pro toto）に基づいていると記されている。つまり、Küspert（1903: 39）の見解や Seto（1999）などの先行研究の理論的見解に基づけば、この多義化ないし意味の変異は、現実世界における部分全体関係内の知覚的に認識可能な領域の拡張・縮小を基軸とするメトニミー型意味変遷過程といえよう[44]。

生物一般の「頭」を指示する caput の原義から、シネクドキ的意味変遷を経て意味が特殊化し、「家畜の頭」という意味となる。体の一部である「頭（あたま）」すなわち頭部のみを意味の指示範囲としていたが、上記の例では「頭（とう）」という数量表現となり、頭部を含む体全体へと意味の指示範囲が変化している。

英語の capital と同様に、ドイツ語の Kapital もラテン語名詞 caput に由来している。英語の capital は、OED（2022）などの提示する定説では、caput の形容詞形 capitālis に由来するとされている。これに対して、ドイツ語の Kapital は、Pfeifer（1989）によれば、この capitālis に加え、その capitālis が中性名詞化した[45]中世ラテン語語彙 capitāle にも由来している[46]。この capitāle は、当初「家畜」という意味を指示していたものであり、同時に現在の「資本」の原型を成す意味も表していた。以下では、ラテン語 caput から中世ラテン語 capitāle を経てドイツ語 Kapital へと

至る意味変遷過程において、家畜の体全体を指示する「頭（とう）」という意味が、「資本」という語義へと至る当該意味変遷過程を媒介していたという可能性を検討してみる。

Laum（1954）は、「資本」という言葉の歴史における「頭を数える」ということの重要性に注目している[47]。「Capitāle とは、頭で数え、計算し、評価が見積もられるものである。そのことは、すでに早くから家畜や奴隷が capita（κεφαλαί）という共通する名称でまとめられていたということから示唆される」[48]。数えるということは、数に入れるということであり、すなわち数える対象を大事なものとして認識するということでもある。この意味の多様化のパターンは、多数の言語で観察される普遍的なものである[49]。対象を数えるという行為は、没個性的認識[50]によって達成されるものである。その認識においては、各個体の諸特性は少数に絞られ、その都度の需要内容に沿った価値の尺度を共通性として統合される。現代における貨幣がそうであるように、物々交換が主要交易方法であった時代における商品は、本来は複雑性と多様性に満ちた価値という複合体から選ばれた任意の合需要的特性によって、計量可能で容易に認識することができるものとして価値を暫定的に表示する媒体・尺度となる。家畜はそうした価値表示・交換媒体となった商品の代表例であり、鋳貨を用いる貨幣制度が確立されるまで代用貨幣として価値表示・交換媒体としての機能を果たしていたということがアダム・スミスなどによって指摘されている[51]。聖書の民数記の記述から分かる通り、逐一数を数えられる家畜は、当時の人々にとっての貴重な食糧あるいは衣服の生地の供給源などの機能を果たしており、人々にとっての財産に相当するものであった[52]。このような家畜を数える記述は、聖書中に遍在しており、特に民数記第 7 章および第 29 章は、これを中心に構成されている。これと類似する事例は、中世ヨーロッパにも認められる。1321 年のルクセンブルク・マリーエンタール修道院の貸農場の財産目録に、同院所有の家畜の数とそれらの価値が記載されている[53]。

食料と衣服を供給する家畜は最古級の財産であるという学説は枚挙に暇がなく、もはや周知の定説と言っても過言ではない[54]。家畜は、財産・富・（交換）価値の原初的形態であった[55]。ゴート語の聖書においては、ギリシア語 μάμων「富、金銭」は faihu-þraihns「家畜の群れ」と翻訳されている[56]。

アダム・スミスやカール・マルクスの多用する言葉を借りて表現するならば、家畜は衣食にわたる生活必需品の原材料として重宝される「使用価値」の高い財産であった。そして、家畜の貴重さが担保となることによってその「交換価値」も高くなり、他の商品と交換可能な貨幣といってもよいアイテムにもなっていた。下記の『ゲルマニア』の記述は、当時の家畜の価値の高さを物語っている：

> “... ne armentis quidem suus honor ... eaeque solae et gratissimae opes sunt.”[57]
>
> ── Tacitus, *De origine et situ Germanorum* V
>
> 「…家畜は実に栄誉であり、…唯一の、そして最も喜ばしい富である」（拙訳）

“Luitur enim etiam homicidium certo armentorum ac pecorum numero, ...”[58]

── Tacitus, *De origine et situ Germanorum* XXI

「例えば人殺しでさえも、幾匹かの牛や羊をもって償われる」（拙訳）

当時のゲルマン社会では、家畜は賠償金に相当するほどの有効な交換手段であった[59]。上記の記述から、人命の補償をも可能とする当時の家畜の価値と貴重さを窺い知ることができる。エンゲルス曰く、「家畜は貨幣の機能を持ち、貨幣の役割を担う」[60]。

ドイツ語における Kapital「資本」は、古典ラテン語というよりも「むしろ中世ラテン語、いわゆる lingua rustica と呼ばれるラテン語末期の方言に直接由来している」[61]。この lingua rustica を基礎として後代にロマンス諸語が形成されたため、capitāle の語源的相当語は、フランス語（capitale）、イタリア語（capitale[62]）、スペイン語（caudal[63]）にも観察される[64]。これらの語はいずれも、「家畜」、「価値」、「貨幣」の意味から出発し、「貸付金額」「商業資本」の意味へと多様化した[65]。中世初期の自然経済を時代背景とする中世ラテン語の文献において、capitāle は「家畜」の意味を指示していた[66]。

„... das Wort Kapital ... bezeichnet ursprünglich nicht sowohl eine Geldsumme, als den Viehstand ... und dies war ... das älteste und wichtigste Kapital, was es im Mittelalter gab.“ (Arnold (1868: 300)).

「資本という言葉は…本来、金銭というよりも家畜を指示しており、…これは中世において、…最も古く、最も重要な資本であった」（拙訳）

Du Cange（1883）の中世ラテン語辞典において、capitāle の第 4 義は次のように定義されている。

“4. Capitale, Captale, dicitur bonum omne quod possidetur, praesertim vero bonorum species ilia, quae in pecudibus consistit ... ”[67]

「所有されているすべての財であると言われている。しかし特に、家畜で構成される財である…」（拙訳）

この「家畜」の意味は、ラテン語の capita（名詞 caput の曲用形）において観察される意味の多様化と同様に、家畜を頭数で数えることに由来している[68]。その後この capitāle の指示する意味は貨幣の領域へと移り、金額の総体を表すようになった[69]。Laum（1954）では、capitāle の指示する意味が家畜から貨幣へと変遷した原因として、ドイツ法における家畜転籍 Viehverstellung という家畜の貸借によって一定の収益を得る制度の収益分配と損害賠償が、現物に加えて貨幣でも評価・補償されるようになったということを指摘している[70]。Laum（1954）

の見解によれば、capitāleという語の指示する意味は、当該制度における金銭と家畜という両貸借対象間の価値的連続性を反映し、自然経済の文脈における「家畜の頭」という意味から、貨幣経済の文脈における「主要財産」「元金」という意味へと変遷する過渡期の状態にあった[71]。

また、Du Cange（1883）の中世ラテン語辞典において、capitāleの第9義は次のように定義されている。

> “9. Congeries, collectio instrumentorum ac rerum omnium, quæ alicui opificio vel negotio inserviunt.”[72]
>
> 「任意の仕事や商取引に役立つ道具立ておよびすべてのものの集合体」（拙訳）

この第9義は、生産活動であるopificium[73]に資する集合体を意味しているという点で、「資本」の意味を部分的に表す、「資本」概念の意義上の萌芽的な表出といえるのではないだろうか。

以上の考察より、ラテン語caputから中世ラテン語capitāleを経てドイツ語Kapitalへと至る意味変遷過程において、「頭（あたま）（の）」という原義から「頭（とう）」という「家畜」を指示する意味を生み出し、その「家畜」という意味が、その貴重さから「財産」という意味とシネクドキ的な意味の関係性を取り結び、またその交換可能性から「貨幣」という意味を機能上の類似性[74]に基づいてメタファー的に生み出した[75]という可能性は否定しきれないものであるということがわかった。

「財産」および「貨幣」「金銭」は、必ずしも生産・投資・利殖を目的としない。これに対して、「資本」および「資本金」は生産・投資・利殖を目的としたものである。おそらく、機能の差異に起因する両義の乖離は、対象の同一性と機能上の近接性に基づくメトニミーによって有機的連関を形成したのではないだろうか。また、経路1の場合と同様に、資本金は「資本」の一形態であるため、「資本金」という意味から「資本」という意味となるのは、シネクドキ的意味変遷過程による意味の一般化と考えることができる。すなわち、「資本金」と、農産物・機械・家畜等のその他の種類の「資本」は、利殖という機能を共に有している。

この意味変遷過程においては、最初にラテン語のcaputが「頭（あたま）」から家畜を表す「頭（とう）」を経由して「元金」「資本（金）」へと至る意味を網羅していた。続いて中世ラテン語のcapitāleは「家畜」から「貨幣」「金銭」を媒介して「資本」に相当する意味へと至った。最後にドイツ語のKapitalは「貨幣」「金銭」から「資本」を意味するに至った。この意味変遷過程の想定経路においては、これらラテン語のcaput、中世ラテン語のcapitāle、ドイツ語のKapitalのそれぞれの意味変遷過程が重なり合いながら、意味が部分的に受け継がれつつ少しずつ遷移していった可能性が想定される（図2）。

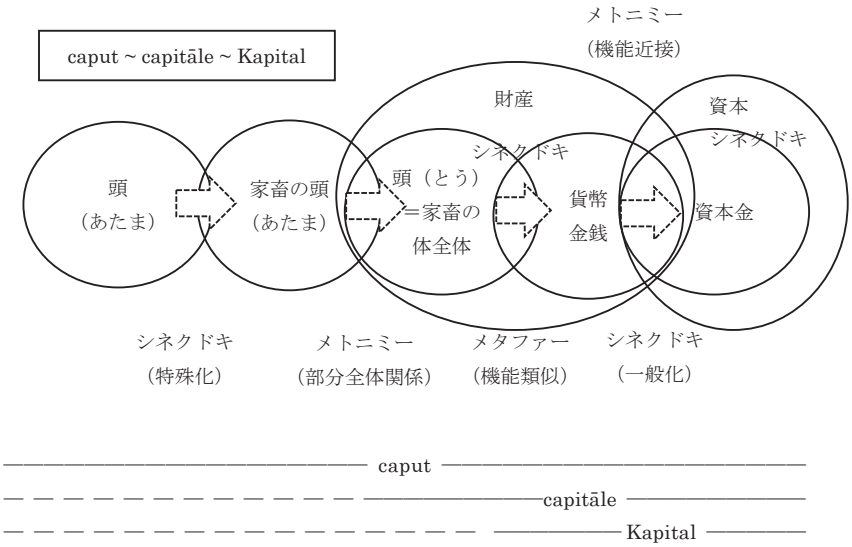

図２　ラテン語 caput から中世ラテン語 capitāle を経由して
ドイツ語 Kapital へと至る意味変遷過程の想定経路

以上より、経路２には一定の有機的連関が観察される（図２）。この推定をより確かなものにすべく、同一の語の意味の内部構造とは別の観点から意味の全体像をとらえる。以下では、「資本」を指示する語 capital の同語源語・類義語の包含する意味についても分析する[76]。

英語語彙においては、capital の他に、stock という語の意味も、「家畜」という語義と「資本金」という語義との間で、同様の意味の経路をとり得る[77]。stock は、古くから「木の幹」[78]という語義を指示することに加えて、「家畜」[79]「資本金」「株」[80]といった計数可能性が前提条件となる意味を複数含んでいる[81]。stock の指示するこれらの意味においては、「貯蔵」という中心的な意味が影響を及ぼしているように考えられる。対象を「数える」ことと「貯蔵する」ということには、対象を「大事なものとして認識する」という共通性がある。capital は、計数可能性を媒介して「資本」という意味へと至る意味の経路をたどっているという点で stock と共通している。

英語 capital の同語源語に、現在では主に「畜牛」[82]を意味する cattle がある[83]。cattle は capital と同じく、「頭（の）」という原義から出発した語である。また、cattle は、古くは家畜一般を意味していた[84]。この cattle の原義「頭（の）」から「家畜」という意味が生じたことは、生物一般の「頭（の）」を指示する原義から「家畜の頭」という意味へと特殊化するシネクドキ的意味変遷を経たのち、「頭」からその頭を含む「家畜の体全体」へとメトニミー的に遷移する意味の多様化の過程を経たと想定することが可能である。その場合、上述のラテン語 caput における意味の想定経路と並行している（図３）。

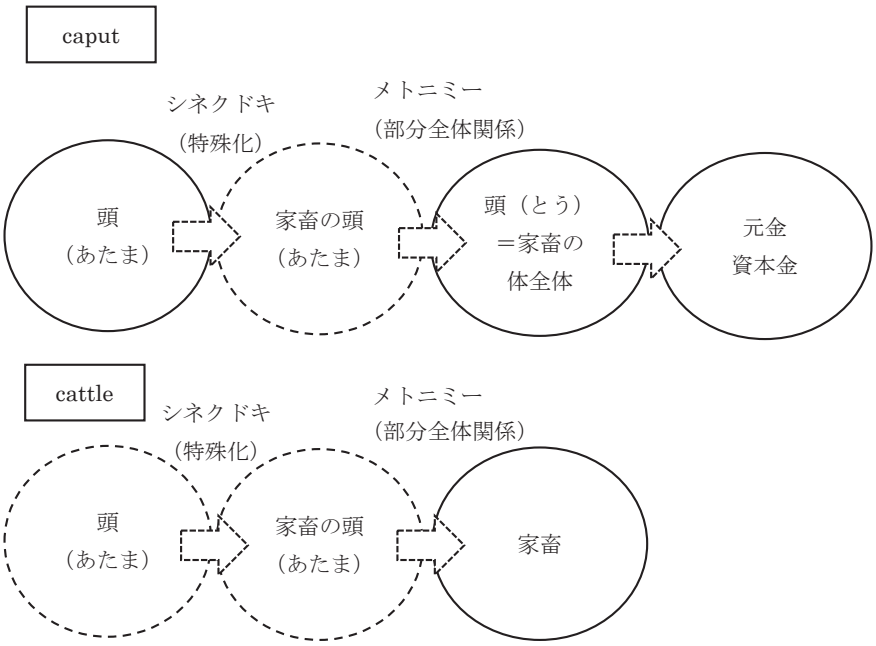

図３　ラテン語 caput と英語 cattle の意味変遷過程の比較

OED（2022）などの提示する主流の説では、当初「財産」[85]という意味を表していたが、その後「家畜」という語義へと限定化・特殊化したという[86]。一方で、「財産」（property）と「家畜」（cattle（in wide sense））という二つの意味は、印欧諸語において、同一の語彙内で、どちらかが先に発生したということではなく、共存していたとする見解が Buck（1988）によって提示されている[87), 88]。それに加えて、「財産」という語義が先行していたならば、その「財産」という語義と「頭（の）」という原義との連関を明示的に説明することが難しくなるのではないだろうか。むしろ「家畜」という語義が先行していたと考えるシナリオの方が、時代背景の順序を反映し、かつ「頭（の）」という原義との結びつきを、「家畜の頭」を経由する前述のような意味の経路によって明示的に説明しうるように思われる。「家畜」は「財産」としての機能を果たすため、両義の間では、類と種の関係に基づくシネクドキ的な意味の関係性が成立している。

capitāle の当初の意味は、「地所（fundus, terra）を指示せず、…動産のみを指示していた」[89]。また、重労働をともなう土地耕作に比べ、牧畜は比較的管理負担が軽減されるため、特に耕作技術が未発達であった段階では、当初食糧自給の手段として牧畜が選択された可能性が高いということがテュルゴーによって指摘されている[90]。よって、古代ローマ人やゲルマン民族をはじめとするインド＝ヨーロッパ語族では、当初「財産」は、「土地」・「不動産」ではなく、専ら「家畜」・「動産」のことを指していたと考えられる[91]。例えば、カエサルは、「彼ら（ゲルマン民族）は農業の研究に勤しむことはせず、その食事の大部分は牛乳、チーズ、肉で構成されている」[92]と『ガリア戦記』で綴っている。

上述の意味の経路と類似するケースとして、ラテン語語彙 pecū「家畜／金銭」[93] および pecūnia「財産／金銭」[94] およびそれらを語源とする英語語彙 fee と古英語語彙 feoh などの意味について考察する。

“pecūnia”という言葉は、もともと“capitāle”という言葉と、「価値・金銭・動産といった同じような意味」を共有しており、両語とも「本来の家畜の意味」と、「Menschenvieh 人間家畜」すなわち「Sklaven 奴隷」の意味を指示する[95]。先述した通り、capitāle の意味は、「土地」・「不動産」を指示せず、「家畜」・「動産」のみを指示していたが、これは pecūnia も当初同様であった。アウグスティヌス曰く、「古代人は、彼らの所有するすべてのものを家畜の中において持っていたため、家畜は pecūnia と呼ばれていた」[96]。

fee の現在の代表的な語義は、「料金」や「報酬」といった金銭に関するものである[97]が、古英語期の語源的相当語 feoh においては、こうした「金銭」といった意味は「家畜」[98]という意味と共存していた[99]。この傍証として、これら fee および feoh に系統的に対応する新高ドイツ語語彙 Vieh は、その古高ドイツ語期の対応語 fihu の頃から「家畜」の意味も指示していた[100]。

印欧語比較言語学の研究史において、fee / feoh は *peku- という印欧語根に遡求可能であるとされている[101]。この *peku- から派生したと推定される各言語の事例のうち、最古級の事例がサンスクリットにおける paśuɥǫ̨ であり、「家畜」という意味と「財産」という意味の両方を指示していた[102]。Pokorny（1959）の印欧語語源辞典では、“to fleece”「（羊）毛を刈る」の語源群と“cattle”「家畜」の語源群は同一の印欧語根 *pek̂- に遡求可能であるとされており[103]、それによれば「羊（のような毛の多い動物）」から「体の小さい家畜、家畜一般」へと意味が遷移した[104]という[105]。

以上の考察より、経路 2 において提示された意味の可能経路の蓋然性が補強された。すなわち、ラテン語 caput から中世ラテン語 capitāle を経てドイツ語 Kapital へと至る意味変遷過程において観察された「家畜」と「財産」「貨幣」「金銭」との間の意味の経路が、英語 capital と同語源語である英語語彙 cattle、capital と類義的関係にある英語語彙 fee の各事例にも同様に観察された（図 4）。

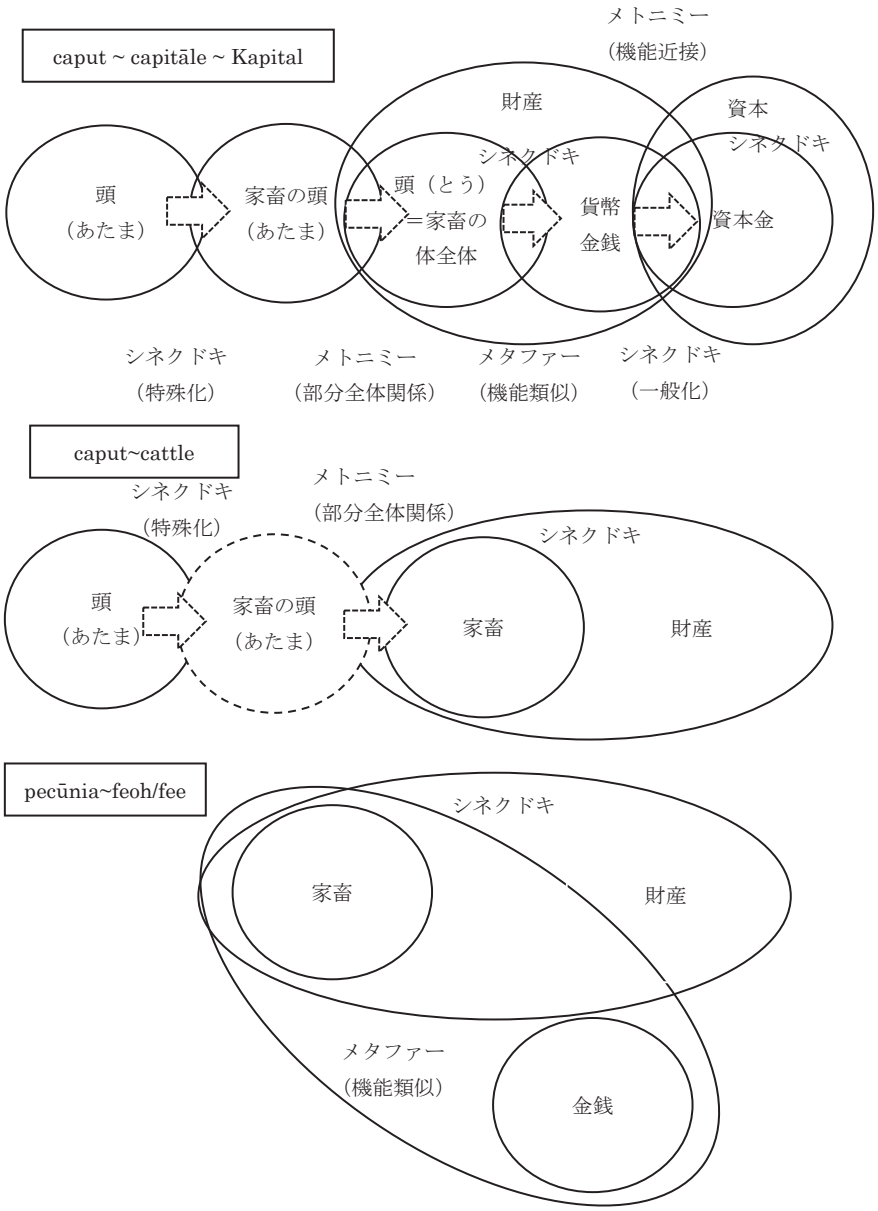

図４　ラテン語 caput ～中世ラテン語 capitāle ～ドイツ語 Kapital の意味変遷過程と英語 cattle・英語 fee の意味変遷過程の比較

経路３：計算貨幣としての家畜を媒介する意味変遷過程

現在の経済史研究では、単純な物々交換は経済学者が理論上仮定する交換方法に過ぎず、現実には観察されないということが徐々に事実として確立しつつある[106)]。一例を挙げると、「アフリ

カのアンゴラ沿岸の未開社会の人々」の間では、取引に際して実物の貨幣は使用されず、macouteと呼ばれる見積もり目的に使用される計算単位のみを媒介して取引が行われていた[107]。また、ヤップ島の巨石貨幣は、交換手段というより、記憶ないし記録媒体としての計算単位として使われていた[108]。近年の貨幣論においては、この例に観察されるような、借用（debt）・信用（credit）・清算（clearing）といった債権（IOU）に関する一連のプロセスを果たす機能こそ貨幣の本質であるという見方が主流になりつつある[109]。上記の事実より、未開社会においても、交換はつねに仮想的な「計算貨幣」の抽象的要素をもとに行われていたと推論され得る。

貨幣を抽象的な計算単位としてみなす貨幣論を最初に展開したのは、アダム・スミスに先立つスコットランドの経済学者ジェイムズ・スチュアートである。スチュアートは自著『政治経済学原理』第三篇の貨幣論において、貨幣とは計算貨幣 money of account であるという説を縷々記している[110]。Steuart（1767）によれば、貨幣の単位は、任意の量の商品の変動する価値に対して不変の固定比率をとることのない、変動する価値の中で常に価値を一定に保つ動的均衡機構であり、価値を測定することができる唯一の永久的・理想的尺度である[111]。近年の貨幣論では、この Steuart（1767）を起源とする貨幣の抽象的機能に着目する貨幣観が継承されている。Martin（2014）はそうした貨幣論の代表例の一つである。それによれば、貨幣は、価値の抽象的単位・会計のシステム・譲渡可能性という 3 つの抽象的な基本要素によって構成されている[112]。

無論、諸経済活動の現象的側面のみに注目すれば、未開社会における物々交換説が完全に謬見であるとはいいきれない。しかし、貨幣の仮想的計算を重視する考え方は、必ずしも物々交換というシステムを完全に否定するものではなく、むしろ Martin（2014）のいうところの「視点を変える（a simple change of perspective）」[113]ということに他ならない。貨幣に関する事実を異なる角度から捉えると、物々交換とは異なる、仮想的計算を基盤とする貨幣観が見出される。計算単位としての仮想的な貨幣を媒介とすることこそ交換の本質であろう。代用貨幣（トークン）の本質も、実際の交換というよりも、計算による数の照合としての会計と清算にある[114]。メソポタミアにおける代用貨幣の本質は、計算による数の照合“correspondence-counting”にあったということが指摘されている[115]。

家畜は、その頭が数えられることによって、交換の計算単位としての計算貨幣の機能を果たしていた可能性がある。家畜は、物々交換に基づく取引システムにおいて機能する代用貨幣というよりはむしろ、より正確には、計算単位としての貨幣そのものであったとも考えられる。

家畜を貨幣そのものであったととらえると、新たな意味経路が浮かび上がってくる。先に論じた経路 2 では、家畜という意味と貨幣という意味は、機能類似[116]に基づくメタファーを媒介していた。家畜を貨幣そのものととらえる場合、家畜は貨幣の一種であるため、家畜から貨幣へと意味が一般化するシネクドキが両義の意味的な媒介機構となる（図 5）。

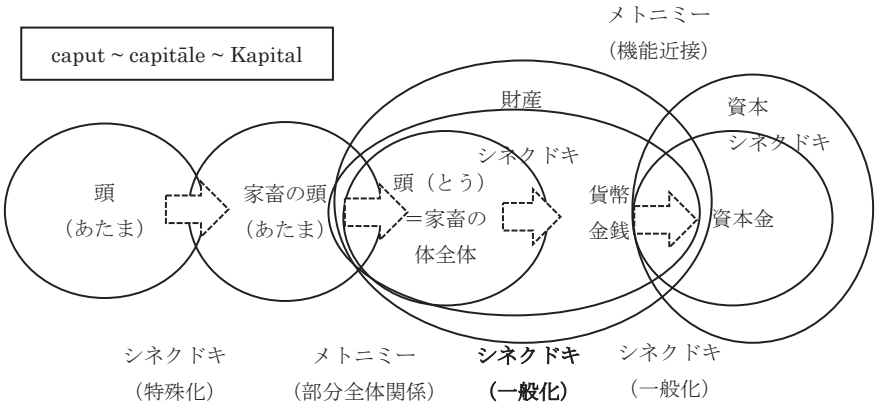

図 5：ラテン語 caput ～中世ラテン語 capitāle ～ドイツ語 Kapital の意味変遷過程
（家畜＝貨幣そのものである場合）

経路 4：生命体の自然繁殖をモチーフとするメタファー経由の意味変遷過程

Hohoff（1918）によれば、古代バビロニア人は金銭を増殖する生命とみなしており[117]、利子と資本をそれぞれ子世代の動物と子孫を産み殖やす親世代の動物として考えていた[118]。「古代ギリシャ人は τίκτω「産む」に由来する τόκος という言葉で利子を表現した。古代ローマ人は「金は利子を産む」pecunia parit usuras と言ったという」[119]。古代ギリシア・古代ローマなどの古典古代で金銭の元金としての資本やその利子を表す言葉には、子孫・出産などの生命の自然繁殖の概念に由来しているものが少なからずある[120]。

Laum（1954）は、貨幣経済においても、家畜という生命に観察されるような増殖・成長が資本の本質とみなされているということを導き出している[121]。capitāle は、11 世紀には特にいわゆる Commenda と呼ばれる契約の記録中において、貿易での投融資額を表すようになった。海外商取引への投融資の利益還元を通じた資本の増加を目的とする Commenda は、イタリアの海洋交易都市の公証記録に多数記録されている[122]。この Commenda と呼ばれる契約においては、貨幣または貨幣価値が商業に投資され、貨幣の所有者の労働を媒介せずにそれ自体から「利益」をもたらし、その結果増加する[123]。このような不労収入をもたらす価値の合計は、資本（商業資本）と呼ばれている[124]。こうした自己増殖する貨幣[125]の呼称として、イタリアでは 11 世紀から capitāle という呼称が商業専門用語として使用されるようになった[126]。Hohoff（1918: 570）によれば、Profit「利益」は「商取引に投資された金銭である「資本」の増加・成長・作用」[127]である。これに従えば、中世ヨーロッパにおける商業上の制度において貨幣および貨幣価値が自己増殖するさまは、古典古代と同様に、「資本」と「利益」の両方に関して、家畜などの生命の自然繁殖のイメージを反映しているのではないだろうか。

近現代の「資本」概念の言説にも、生命体の自然繁殖をモチーフとする比喩的表現が多用されている。カール・マルクスは自著『資本論』において、資本概念を表現する際、比喩的な表現を

多用している。価値は「自分自身から突き放し」(sich als Mehrwerth von sich selbst als ursprünglichem Werth abstösst)、「赤子 lebendige Junge」ないし「金の卵 goldne Eier」を「産み出す wirft / legt」といった表現などが顕著な例として挙げられる[128]。これらの資本概念の表現は、明らかに生物の出産（ないし産卵）という生命の誕生と繁栄をモチーフとするメタフォリカルな比喩表現である[129]。『資本論』研究で名高い宇野弘蔵も自著『経済原論』で資本を「遊ばしてはおけないもの」と評している[130]。宇野によるこの言説は、小屋や柵の中に入れられ常に監視・管理され続ける家畜のプロトタイプ的イメージと重なる。これらの経済学上の言説では、「資本」という概念と「家畜」という意味とは、自己増殖を繰り返す運動体[131]という点で密接に関連している。

資本は元本であるため、利益ないし利子とは対立してとらえられる。古来ドイツでは資本出資を hovetstol（Hauptstuhl）と呼び、wynnynge（Gewinn）（利益）と対比させてとらえていた[132]。Adelung によるドイツ語辞典の「資本」Das Capital の定義においても、利益・利子との対立構造が浮き彫りとなっている[133]。

家畜という生命体とそれが産む子供との関係性は、発生源からの産出による増殖という機能の類似に基づくメタファー[134]によって、「資本」と「利益」・「利子」との対立構造へと投射されうる（図 6）。家畜という生命体とその家畜が産む子供との間には、因果関係に基づくメトニミー的関係性が成立しており、そのメトニミー的関係性がメタファーとして投射されることによって意味が多様化していると考えられる。

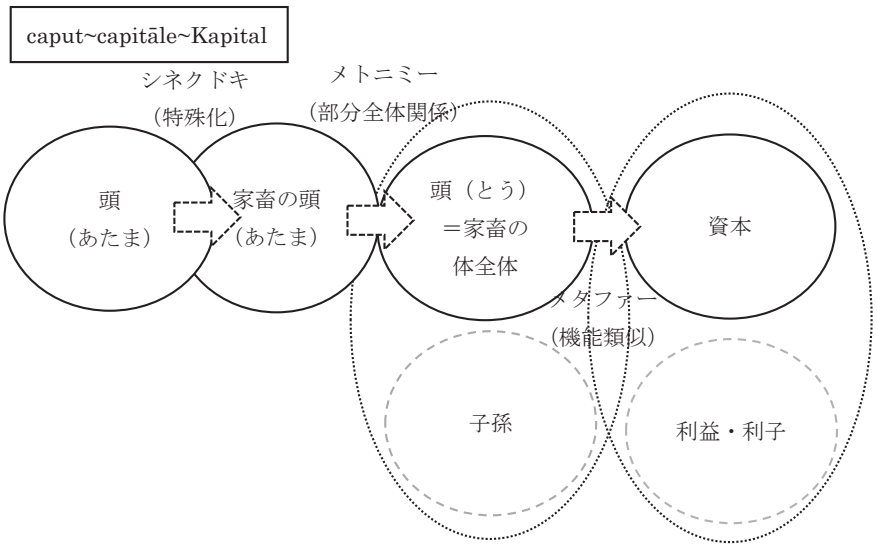

図 6　ラテン語 caput ～中世ラテン語 capitāle ～ドイツ語 Kapital の意味変遷過程
（生命体の自然繁殖をモチーフとするメタファーを経由する場合）

意味経路間の有機的考察

以下では、各意味経路単独の分析では解明されえない意味の有機的連関を、経路横断的に分析する。

経路１における「頭（の）」という語義から「重大な（こと）」・「致命的な（こと）」という語義に至るシネクドキ的意味変遷過程においても、「頭」が体という構造の中で「重大な（こと）」・「致命的な（こと）」として認識されるには、その「頭」を含む体全体が想像されていることが前提となる。反対に、経路２および経路３において観察される、「頭」という語義からその頭を含む体全体を表すようになるという、部分全体関係を基盤としたメトニミー的意味変遷過程は、体全体の中において、「頭」が生命体にとって重要な部分であるという認識なしには成立しえない。よって、経路１のシネクドキ的意味変遷過程と、経路２および経路３のメトニミー的意味変遷過程は、相互に前提条件となる関係にある。

経路１における「資本金」である「元金」が「主要な」金銭として認識されるには、「主要」である「元金」が、その「元金」と対立する副次的な金銭を新たに「生み出す」という機能が前提となる。反対に、経路４における、「資本」とその「資本」が生み出す「利益」ないし「利子」とのメトニミー的な因果関係は、「元金」が金銭の中で「主要な」ものであり、それに対して、そこから生じる「利益」ないし「利子」が副次的なものであるという認識なしには成立しえない。よって、経路１のシネクドキ的意味変遷過程と、経路４のメトニミー的な因果関係とは、相互に前提条件となる関係にある。

このように、各意味経路を横断するようにして、メトニミー的意味変遷過程とシネクドキ的意味変遷過程が相互に連関しつつ、英語 capital とドイツ語 Kapital の指示する意味は多様化しているという可能性がある。すなわち、経路１の意味変遷過程は、それ自体有効である一方、先に提示した他の経路２・３・４に観察されるような意味の多様化のメカニズムの影響を少なからず受け、相互に有機的に連関しつつ、時として同語源語間ないし類義語間の意味的な類推作用も受けながら、英語 capital とドイツ語 Kapital という同語源語間の意味の全体像を形成しているのではないだろうか。

結論

以上の本論文の分析では、「資本」概念を言語的側面から追究すべく、「資本」概念を指示する英語 capital とドイツ語 Kapital における意味の変遷過程を分析した。分析にあたって、「資本」概念を指示する両語共通の原義「頭（の）」から語義「資本」に至るまでの意味の多様化の経路のシミュレーションを試み、４つの意味の経路を想定した。英語 capital に観察される経路１は、「重要な（こと）」・「致命的な（こと）」ないし「主要な（もの）」という語義を媒介として変遷する意味の経路である。ドイツ語 Kapital に観察される経路２は、家畜の体全体を指示する「頭

（とう）」という類別詞的な意味を媒介として変遷する意味の経路である。同じくドイツ語 Kapital に観察される経路 3 は、家畜が貨幣そのものである場合の意味の経路である。同じくドイツ語 Kapital に観察される経路 4 は、家畜における子孫の自然繁殖と、資本における利子・利益の自己増殖との間の機能類似に基づいたメタファーを媒介として変遷する意味の経路である。

経路 1 は、既に先行研究で提示されている見解であり、一定の客観性が認められる。しかし、「頭（の）」という原義から「資本」という語義に変遷する必然性が不明瞭なままである。

経路 2 については、「頭（あたま）の」というラテン語時代の原義は、ドイツ語 Kapital の現在的な意義として残存していないという難点がある。しかし、Kapital の語源を遡れば、「頭（あたま）」を意味するラテン語 caput からその形容詞形 capitālis、さらにそれが中性名詞化した中世ラテン語 capitāle へと至る語形・品詞の移り変わりを経た意味の変遷過程が観察されることは事実である。また、「頭（とう）」という意味が英語 capital 自体には明示されていないという難点がある。ただし、「頭（とう）」という語義が含まれる caput は capital の名詞形に相当する同語源語である。一方で、「頭（の）」という原義から「家畜」という意味を媒介して「資本」という語義に至るという意味の想定経路には、経路 1 とは異なる原義との有機的連関が提示されており、一定の客観性が見受けられる。

経路 3 は、経路 2 における経済学上の理論的遅滞が更新されているため、現在の経済学的視点からは経路 2 よりもさらに有効な想定経路となったといえる。ただし、経路 2 と同様の言語学上の難点は依然として残されたままである。

経路 4 は、経路 2・経路 3 と比べて、意味の経路の経由数が少なくなっているという点で有効性が増している。ただし、他の語との意味的関係性を論じるには、更なる検証が必要である。

以上の総合的考察の示す通り、4 つの意味の想定経路にはそれぞれ妥当性と難点があり、一つの想定経路だけが正しいと断定することは困難である。むしろ、4 つの意味の想定経路はそれぞれ有効であり、「意味経路間の有機的考察」の章でも述べたように、相互に影響を与え合いながら複線的な意味変遷の総体として我々の前に現出しているのではないだろうか。単一の経路に沿って意味が変遷するとは限らず、多様な要素がシネクドキ・メトニミー・メタファーなどの多義機構を媒介して複合的に絡まり合うことで、各語の指示する意味が総合的に決定されていくのではないだろうか。それらの多義機構は、多種多様な意味をとり結ぶだけでなく、それら自体も相互に有機的連関をとり結ぶことによって、各語の内包する意味の多様性を現出しているのではないだろうか。各経路の意味変遷過程は、それ自体有効である一方、他の経路に観察されるような意味の多様化のメカニズムの影響を少なからず受け、相互に有機的に連関しつつ、時として同語源語間ないし類義語間の意味的な類推作用も受けながら、capital という語の意味の全体像を形成しているのではないだろうか。

「資本」という概念を意味する語が capital ないし Kapital でなければならない理由を改めて考察してみる。「資本」という概念は、「家畜」と密接に結びついていたものであり、「資本」という意味を表すには、「家畜」の語義を意味していた語に由来する Kapital を多義的に使用するこ

とが妥当と考えられたのではないだろうか。実際、「資本」という概念は、『資本論』などにおいて、生命の誕生・増殖をモチーフとした比喩表現によって表現されており、「資本」概念が「家畜」という意味に少なからず影響を受けているということは十分に推論可能である。

本論文の当初の最低限の目的は、先行研究を整理しつつ、意味論的観点から精査・検証し、「資本」概念における意味経路に関する論点を明確化することであった。しかし、結果として、当初想定していたよりも多種多様な意味分析の可能性を提示することができたかもしれない。「資本」概念の意味の想定経路の理論的基盤を追究し、各意義間の有機的連関の可能性を多角的に提示することができた。そして各意味経路における重要な意味の接点・交点には、メトニミーを中心とする意味の重層構造が形成されていることが浮き彫りとなった。

本論文の分析を通して、「資本」という極めて現代的な経済学上の概念が、「家畜」という意味を媒介として「頭（の）」というプリミティヴな原義から少なからず影響を受けている可能性が示されたということは大変興味深い。現代において中心をなす語義は、古来の原義とは無関係であるとは限らない。一見すると単調で原始的な原義は、時に明示的に表現され、時に潜在的に含意され、さまざまな形で語の意味の中に生き続けているかもしれない。

本稿における分析では、単一の語の内部の多義構造の分析にとどまらず、同語源語間の意味の有機的関係性をも解明することを試みた。現在の言語感覚では遠く感じられる原義は、現代的な語義に至るまで、それぞれの同語源語の中で多種多様な語義へと変遷していく過程にあっても、変転しながら受け継がれていくという可能性はやはり否定できない。本稿の分析手法を発展させれば、将来的には、同語源語間の意味の原初的体系を解明する意味的再構に活用することが可能となる。今後も本論文での分析経験を活かし、試行錯誤を繰り返しつつ分析手法を洗練させ、経済学上の他の概念の言語的分析によって、有用な研究成果を提供することを目指す。

謝辞

本論文は、柴山桂太先生による長期にわたる御指導の賜物です。特に「資本」概念と貨幣論に関する柴山先生の鋭い御指摘の数々なしには、本論文完成に至るまでの研究の飛躍的発展は難しいものとなったでしょう。経済学研究の最前線の潮流を俯瞰する卓見の支えがあってこそ、本論文の展望する地平は広がりました。言語の視点から経済を研究するという創造的困難に挑戦する小生の萌芽的な意志を、小生の非力さや未熟さを疑うことによって牽制することなく、むしろ温かく受け入れ、育て、意欲を評価していただき、経済学研究のエッセンスを授けていただいたことは、小生の研究人生にとって一大契機となるでしょう。柴山桂太先生には、この場を借りて厚く感謝申し上げます。

註

1）本論文は、京都大学人間・環境学研究科・学際研究演習（大学院専門講義（柴山桂太先生）・2020年10月）における発表内容を発展させたものである。

2）以降本論文では、メタファー・メトニミー・シネクドキは、文以上のレベルにおいて発生する臨時的用法の比喩ではなく、語彙的に定着した規範的な多義類型のことを指す。

3）この場合の「語源」とは、厳密には、主に印欧語比較言語学などの学術分野において検証された系統的音対応を指す。以降本論文における「語源」という表現は、この意味を指す。

4）例えば、カエサル（Gaius Julius Caesar，前1世紀頃）；ルクレティウス（Titus Lucretius Carus，前1世紀頃）；ウェルギリウス（Publius Vergilius Maro，前1世紀頃）；ホラティウス（Quintus Horatius Flaccus，前1世紀頃）；リウィウス（Titus Livius，前1世紀～後1世紀頃）；オウィディウス（Publius Ovidius Naso，前1世紀～後1世紀頃）；セネカ（Lucius Annaeus Seneca（小セネカ），前1世紀～後1世紀頃）；タキトゥス（Cornelius Tacitus，後1世紀～後2世紀頃）他。

5）この時間的連続性に沿った意味の多様化は、辞典の語義配列の順序にもしばしば反映されている。例えば、Paul（2002）などの辞典では、主に人間の認識における時間感覚 Zeitsinn に沿った語義欄の配置順序となっている。時間感覚 Zeitsinn とは、ドイツ語辞典の一つである Paul（2002）の前文（Paul (2002: XIII) „Die verschiedenen Bedeutungen eines Wortes sind im allgemeinen im Zeitsinn geordnet.“）に記載されている、語義欄の配置順序における規準を指す。

6）Zalizniak et al. (2012: 634f.).

7）なお、OED（2022）や寺澤（1997）などの各辞典の意味記述は言語資料に基づいた記述であり、その限りで基本的には歴史的な時間的連続性に沿うものである。

8）Seto (1999).

9）Suzuki (2021: 103f.). このような理論的位置づけは、Radden & Kövecses (1999) などをはじめとする認知意味論の先行研究史における主張に通ずる要素がある。ただし、彼らは内的思考としての concept（概念）と外界である現実世界（real world）を連続したものとしてとらえているようであり、Seto (1999) などのように現実世界と概念思考の対立を提起しているわけではないようである。

10）Seto (1999); Suzuki (2021: 86f.).

11）Nerlich & Clarke (1999: 199f.).

12）e.g. “Of capitale medecenes [*Ch.(2): þe cheef medicynes; L medicinis capitalibus] & instrumentez wyþ which is made operacioun in þe woundes of þe heued.” (?a1425 *Chauliac (1) (NY 12)5a/a) (Lewis et al. (1952)); OED (2022); 寺澤（1997: 194）.

13）e.g. “Ye have now heard one part, my dear sisters, of what are called the seven capital sins, and of their progeny, and of the offices which the men who have married these seven hags serve in the devil's court, and why they are greatly to be hated and avoided.” (Morton (1853: 217)); OED (2022); 寺澤（1997: 194）.

14）e.g. “So that among these many Arguments, there is not one, but doth clearly detect, and throughly refute the Error of those Men, who have confounded the Uses of the Arteries, and Lungs, of Pulsation and Respiration. This capital Error eschewed, we may the more safely progress to explicate the nature of Respiration, as a thing in sundry particulars distinct from Pulsation, though perchance instituted by Nature, as in some sort subservient to the vital Faculty.” (Charleton (2004: 129)); OED (2022); 寺澤（1997: 194）.

15）e.g. “The 20th of November, (anno 1704) I observed the wheat on the ground, and that the first, or

capital branch, consisted of an upright spire, between two leaves falling on the ground; but the issues or tillows, be they never so many, had but one leaf on one side of the spire, by which the issues are to be discerned from the main branch ; and in both good and poor wheat the difference was the fame." (Lisle (1757: 136)); "The suspicions of his brethren arising from the above misrepresentation of it, he takes to have been the chief, if not only, reason of his having been refused the pulpit at so many capital churches." (Scott (2008: ix)); OED (2022); 寺澤（1997: 194）.

16）e.g. "As the supply [of money] increases, the weight of the mortgage, both as regards the payment of interest and the repayment of the capital, diminishes." (1855 Hunt's Merchants' Mag. Jan. 34; Merchants' magazine and commercial review · 1839–70 (1851–60 with title Hunt's merchants' magazine and commercial review)). (OED (2022)); 寺澤（1997: 194）; "Originally the word Capital (Capitale from Caput) was used to signify the Principal of a money loan (Capitalis pars debiti) in opposition to the Interest. ... Capital meant the same thing as "an interest-bearing sum of money."" (Böhm-Bawerk (1891: 24)).

17）e.g. "After agriculture, the capital employed in manufactures puts into motion the greatest quantity of productive labour, and adds the greatest value to the annual produce." (Smith (1976: 44)); "A flock of sheep or a herd of cattle that, in a breeding country, is bought in, neither for labour, nor for sale, but in order to make a profit by their wool, by their milk, and by their increase, is a fixed capital." (Smith (1976: 280)); OED (2022); 寺澤（1997: 194）.

18）なお、これと同様の経路は、ラテン語語彙 caput の語義変遷過程に関しては、Küspert（1903: 12）によって既に提示されている。

19）Suzuki (2021: 103). Seto (1999) の指摘するパートノミーとタクソノミーの混同（PT 誤謬）に起因するメトニミーとシネクドキの合同的認識現象により、元来メトニミーはシネクドキと区別しづらい傾向にある。特にこのような心理的要素が主体となるタイプのメトニミーは、概念思考を基盤とするシネクドキとの区別が一層難しい。この論点について本稿においてこれ以上詳細に論じることは、紙幅と論の展開のバランスの点で困難であるため、時機を改めて論究する。

20）"Animadvertit Caesar unos ex omnibus Sequanos nihil earum rerum facere quas ceteri facerent sed tristes capite demisso terram intueri. Eius rei quae causa esset miratus ex ipsis quaesiit." (Caesar (1914: 38)); Lewis & Short (1879: 289f.).

21）"Fundum in Ueienti, caput patrimonii, subiecit praeconi, 'ne quem uestrum' inquit, 'Quirites, donec quicquam in re mea supererit, iudicatum addictumue duci patiar.' id uero ita accendit animos, ut per omne fas ac nefas secuturi uindicem libertatis uiderentur." (Livius (1914a: 23)); Lewis & Short (1879: 289f.).

22）"Sed quid ego uos de uestro impendatis hortor ? sortem reliquam ferte: de capite deducite quod usuris pernumeratum est; iam nihilo mea turba quam ullius conspectior erit." (Livius (1914a: 25)); Lewis & Short (1879: 289f.); "De capite, de summa, de sorte aliquid detrahere, remittere" (Wagner (1878: 102)).

23）OED (2002); 寺澤（1997: 1110）.

24）OED (2022); 寺澤（1997: 1353）.

25）e.g. "He thinkes that all this is too little for a stock, though it were indeede a good yearlie Income." (1614 W. RALEIGH Hist. World I. V. ii. §2. 377; Walter Raleigh, The history of the world, 1st edition, 1614 (1 vol.), At London: Printed for Walter Burre). (OED (2022)); 寺澤（1997: 1353）.

26）e.g. "The Stock of these Trees, if they deserve that Name, grow to once and a half or twice Man's height." (1705 tr. W. Bosman New Descr. Coast of Guinea xvi. 291; Willem Bosman, A new description

of the coast of Guinea, 1st edition, 1705 (1 vol.)). (OED (2022)); 寺澤（1997: 1353）.

27）瀬戸（2007: 5f.）.

28）e.g. “The stocke of the body begynnyth at the necke and stretchyth to the buttockes.” (1398 J. TREVISA tr. Bartholomew de Glanville De Proprietatibus Rerum (1495) V. l. 168).（現在では廃義）(OED (2022)); 寺澤（1997: 1353）.

29）OED (2022); 寺澤（1997: 1353）.

30）e.g. “We have not cared to keep on hand a larger stock than we could dispose of in the season.” (1868 M. PATTISON Suggestions Acad. Organisation v. 167; Mark Pattison · Suggestions on academical organisation, with especial reference to Oxford · 1st edition, 1868 (1 vol.). Edinburgh); “I wanted a Stock of Words.” (a1790 B. FRANKLIN Autobiogr. (1981) I. 14; Benjamin Franklin · Autobiography of Benjamin Franklin: a genetic text · Ed. by J.A. Leo LeMay, 1981. Knoxville: Tennessee U.P) (OED (2022)); 寺澤（1997: 1353）.

31）«CAPITAL, ALE, AUX adj. et n. est emprunté (v. 1200) au latin capitalis « de la tête », dérivé de caput « tête » (→chef). ... Le sens propre de « relatif à la tête » (v. 1200) s'est seulement maintenu avec l'acception juridique de « qui peut coûter la tête à qqn » (v. 1255) ... En procède un emploi figuré usuel avec le sens d'« important, essentiel » (1389). » (Rey (2010: 1718)).

32）«Il est substantivé au sens imagé de « partie supérieure » (→chapiteau), notamment pour désigner l'en-tête d'un livre, le chapitre (→chapitre), puis à basse époque la partie essentielle d'une chose.» (Rey (2010: 1718)).

33）«... Depuis 1567, un emploi substantivé du masculin capital est attesté en économie et destiné ... à faire fortune ... Le capital correspond d'abord à « partie principale d'une dette » ... puis « d'une rente » ... Depuis 1606, il désigne également « la somme que l'on fait valoir dans une entreprise » (→fonds) et depuis 1767, au pluriel capitaux, « l'ensemble des sommes en circulation, des valeurs disponibles ». » (Rey (2010: 1718)).

34）e.g. „mîn houbetgelt smal unde breit. daz man mir bûwete unde sneit.“ (Reiffenstein (1962); Deutsches Textarchiv (DTA) (URL: https://www.deutschestextarchiv.de/rem/?d=M355-G1.xml)); „Durch Kapital werden ältere Bezeichnungen wie Hauptgut, spätmhd. houbetguot, houbetsumme, houbetgelt, ... ungebräuchlich.“ (Pfeifer (1989)).

35）„kap-ut, -(ē)lo- head ... Kopf ... ursprüngl. etwa ‚Schalenförmiges‘, s. unten. Ai. kapucchala- n. ... ‚Haar am Hinterkopf, Schopf, Schale‘; lat. caput, ... ‚Kopf, Haupt‘; ... im Germ. daneben got. haubiþ ‚Haupt, Kopf‘, anord. haufuð, ags. hēafod, ahd. houbit, nhd. Haupt ...“ (Pokorny (1959: 529f.)).

36）この言説は、ソシュールの記号の恣意性の原理（Saussure（1916: 100ff.））に反旗を翻すように見えるかもしれない。しかしこれは、記号の恣意性を否定するというよりかは、記号の恣意性の適用範囲が従来考えられて来たよりも狭いということを主張するのみである。

37）Laum (1954: 75f.).

38）Laum (1954: 76).

39）„Die Verwendung als "pars pro toto" begegnet uns überall dort, wo eine größere Menge "kopftragender" Wesen zahlenmäßig festgestellt wird.“ (Laum (1954: 76)).

40）“Sequitur quartum de emptione: fit alterius, cum a priore domino secundo traditus est. De sanitate et noxa stipulationes fiunt eaedem, quae in pecore, nisi quod hic utiliter exceptum est: alii pretium faciunt in singula **capita** canum, alii ut catuli sequantur matrem, alii ut bini catuli unius canis numerum obtineant, ut solent bini agni ovis, plerique ut accedant canes, qui consuerunt esse una.” (Cato & Varro

(1934: 399f.)).

41）Küspert (1903: 39).

42）“Triginta capitum fetus enixa iacebit, Alba, solo recubans, albi circum ubera nati: ...” (Vergilius (1876: 144)).

43）„1 zunächst >abgetrennter Teil eines Ganzen< ... daneben 2 >Teil< im Sinn eines zusammenhängenden Ganzen ...“ (Paul (2002: 979)).

44）メトニミー型意味変遷が caput において生じているという事実を確認した。ラテン語名詞 caput の形容詞形が再度名詞化した英語名詞 capital においてもこうした意味変遷が生じたという事実はない。しかし、一方で、capital と同語源語の関係にある caput ではそうした意味の多様化現象が観察されたということは事実であり、同語源語間の意味的な相互影響は皆無であると完全に否定することが困難であるということもまた事実である。

45）“... **Latin capitāle , neuter of the adjective capitālis** head-, principal, capital adj., used substantively in mediæval times in the sense ‘principal sum of money, capital, wealth, property ...” (OED (2022)); “CHEPTEL ... continue **le latin capitale « ce qui fait l'essentiel d'un bien » (IX e s.), « bétail », substantivation de l’adjectif capitalis** « de la tête » et au figuré « principal » (→capital).” (Rey (2010: 1999)).（太字強調は筆者による）。

46）„**Kapital** n. ‚Vermögen, (zinstragende) Geldsumme‘, entlehnt (Anfang 16. Jh.) aus ital. capitale ‚Wert, Grundsumme, Vermögen in Geld, Reichtum‘, **das auf lat. capitālis ‚den Kopf, das Leben betreffend, hauptsächlich‘, auch ‚schwerwiegend, wichtig‘, mlat. (substantiviert) ‚bewegliches Gut, Wert, Grundsumme‘ beruht**; zu lat. caput ‚Haupt, Kopf, Spitze, Hauptperson, Anführer, (Haupt) abschnitt, -absatz‘, von Geld und Geldeswert ‚Hauptsumme, Grundstock, Kapital‘.“ (Pfeifer (1989)).（太字強調は筆者による）。

47）„Wir werden sehen, daß dieses Zahlen nach Köpfen für die Geschichte des Wortes„ Kapital" von erheblicher Bedeutung gewesen ist.“ (Laum (1954: 76)).

48）„Capitale ist danach das, was nach Köpfen gezählt, gerechnet, geschätzt wird. Es scheint, dass schon früher Vieh und Sklaven unter dem gemeinsamen Namen "capita" (kephalai) zusammengefasst wurden“ (Hohoff (1918: 558)).

49）Database of Semantic Shifts in languages of the world (DatSemShift) (https://datsemshift.ru/shift0002; https://datsemshift.ru/shift0001).（最終閲覧日時：2022 年 8 月 18 日 20 時 05 分）
この意味の経路に鑑みれば、capital の語義のうち、計数対象を指示する「頭（とう）」という語義と「主要な」という語義は関連している可能性がある。

50）太田（2002: 307ff.）.

51）Smith (1976); Buck (1988: 773); Schrader (1901: 281). “In the rude ages of society, cattle are said to have been the common instrument of commerce; and, though they must have been a most inconvenient one, yet in old times we find things were frequently valued according to the number of cattle which had been given in exchange for them.” (Smith (1976: 38)); “The chief standard of value in the IE period and in the history of the IE-speaking peoples before the introduction of actual ‘money’ based on coinage was cattle (in the old wide sense ‘livestock’). This is amply attested for the several peoples by direct references and is also reflected in the interchange of ‘cattle’ with ‘property’ or ‘money’ in an inherited IE group and some others.” (Buck (1988: 773)); „Der älteste Wertmesser der idg. Völker sind die Herdentiere, und unter ihnen vor allem die Milchkuh.“ (Schrader (1901: 281)).

52）“And the Lord spake unto Moses, saying, Take the sum of the prey that was taken, both of man and of

beast, thou, and Eleazar the priest, and the chief fathers of the congregation: and divide the prey into two parts; between them that took the war upon them, who went out to battle, and between all the congregation: ...” (Num.31: 25–27).

53）Lamprecht (1885: 946); „So heißt es im Inventar der Pachthöfe des Luxemburger Priorats Marienthal vom Jahre 1321: "De capitalibus orreorum dominarum prioratus Marienthal: Equi, boves, vaccae, oves, porci, caprae," deren Zahl und Wert angeführt wird.“ (Hohoff (1918: 566)).

54）„Die wichtigste Rolle im Leben der alten Arier spielt die Kuh, Für das wirtschaftliche Leben versteht sich das von selbst, denn kein anderes Tier gibt so leicht und bequem Nahrung wie sie. Nach ihrem Besitz bestimmte sich der Reichtum ...“(Arnold (1881: 17)); „Vor allem sind es die Haustiere, welche den Menschen in den ersten Anfängen seiner Entwicklung nähren und kleiden; in ihrem Besitz besteht der älteste Reichtum. “(Arnold (1881: 383)).

55）„Vieh war überhaupt die erste und ursprünglichste und anfangs alleinige Form des "Vermögens", des abstrakten oder gesellschaftlichen Reichtums, des Wertes, das heißt Tauschwertes.“ (Hohoff (1918: 564)); “In rusticatione vel antiquissima est ratio pascendi, eademque quaestuosissima ... ” (Columella (1829: 120)).

56）Luke 16: 9 jah ik izwis qiþa: taujaiþ izwis frijonds us faihuþraihna inwindiþos, ei þan ufligaiþ, andnimaina izwis in aiweinos hleiþros. — καὶ ἐγὼ ὑμῖν λέγω, ἑαυτοῖς ποιήσατε φίλους ἐκ τοῦ μαμωνᾶ τῆς ἀδικίας, ἵνα ὅταν ἐκλίπῃ δέξωνται ὑμᾶς εἰς τὰς αἰωνίους σκηνάς. — And I say unto you, Make to yourselves friends of the mammon of unrighteousness; that, when ye fail, they may receive you into everlasting habitations. (Wulfila Project (URL: http://www.wulfila.be/gothic/browse/text/?book=3&chapter=16#V9)); Hohoff (1918: 564f.).

57）Tacitus (1878: 3).

58）Tacitus (1878: 16).

59）„Darum werden die Bussen in Vieh angesetzt, das Wergeld in Vieh entrichtet und selbst der Totschlag durch eine bestimmte Zahl von Viehhäuptern gesühnt ...“ (Arnold (1881: 383)).

60）„Der Hauptartikel, den die Hirtenstämme an ihre Nachbarn im Tausch abgaben, war Vieh; Vieh wurde die Ware, in der alle andere Ware geschätzt und die überall gern im Austausch gegen jene genommen wurde - kurz, Vieh er hielt Geldfunktion und that Gelddienste ...“ (Engels (1886: 124)).

61）„Das moderne Wort "Kapital", im Sinne der heutigen Wirtschaftswissenschaft, kommt vielmehr unmittelbar aus dem mittelalterlichen Latein, der sog. "lingua rustica", der Volkssprache der spätlateinischen Zeit.“ (Hohoff (1918: 558)).

62）«capitàle ... lat. CAPITALIS ... da CAPUT ...» (Pianigiani (1907: 229)).

63）Hohoff (1918: 574). “Bienes o dinero que tiene una persona: *El abuelo reunió un buen caudal.*” (Gutiérrez Cuadrado & Bargalló et al. (1996: 286))（定義）「一人の人間が所有する財産または金銭」（例文）「祖父はかなりの財産を集めた」

64）Hohoff (1918: 574).

65）„... zuerst in der Bedeutung von Vieh, Wert, Geld, dann auch in der Bedeutung von Darlehenssumme und Handelskapital.“ (Hohoff (1918: 574)).

66）„Wir haben gesehen, daß in der Naturalwirtschaft des Frühmittelalters das Wort „capitale“ in der Bedeutung „Vieh“ verwendet worden ist.“ (Laum (1954: 85)). Laum (1954) によれば、「家畜の群れ」という capitale の意味は、古代ローマ時代の用法には存在せず、中世ラテン語ではじめて使用されたという (Laum (1954: 81))。

67）Du Cange (1883: 131). “Promitto quod nulla Capitalia seu res dicti dom. episcopi in dicta domo mea receptabo per me vel per alium, seu detinebo.” (Du Cange (1883: 131)).「前記の家の財あるいは富がないことを保証します。私は自分自身または他の人によって、司教を私の前記の家の中に招き入れるか、または留め置くでしょう」Du Cange (1883: 130–133) の中世ラテン語辞典における capitāle の記述においては、この第４義の他にも、第６義は以下のように家畜と密接に関連した内容であるということがわかる。“6. Idem quod supra Capitagium 1.”「上記 Capitagium 1. に同じ」→“1. CAPITAGIUM, Idem quod Catallum, Præstatio, quæ mortis tempore domino exsolvitur.”「Catallum に同じ、死亡時に領主に支払われる給付」→ “CATALLUM, Idem quod Capitale, Bona omnia quæ in pecudibus sunt.”「Capitale と同じ、家畜にあるすべての財」(Du Cange (1883)).

68）„Der Ursprung des Wortes „Kapital“ geht in die Naturalwirtschaft des Frühmittelalters zurück; und zwar wird in den lateinisch abgefaßten Urkunden dieser Zeit das Vieh „capitale“ genannt; der Name stammt von dem Abzählen des Viehes nach Köpfen (lat. „capita“).“ (Laum (1954: 107)).

69）„Vom Hochmittelalter ab erfolgt ein Bedeutungswandel; das Wort wird in die Geldsphäre übernommen und bezeichnet nunmehr eine Summe Geldes.“ (Laum (1954: 85)); Hohoff (1918: 563). ラテン語語彙 capitāle の「金銭の総額」という意味は、中世ラテン語期からのものであり、古代ローマ時代にはまだ存在しなかったという（Laum（1954: 74–79））．ただし、名詞 caput には、その「金銭の総額」という意味が古典ラテン語期から存在していた（Lewis & Short (1879: 289f.); Laum (1954: 77)）。同語源語間における意味の相互影響は、果たして皆無であったのであろうか。

70）Laum (1954: 85ff.; 107); „... unser heutiges Wort Kapital bedeutet ursprünglich weiter nichts als das zur Bewirtschaftung eines Gutes gehörige Vieh (capitale), im Gegensatz zum toten Inventar oder dem Gerät, eine Bedeutung, von der wir freilich kein Bewusstsein mehr haben, denn seit dem Aufkommen der Geldwirtschaft denken wir bei dem Ausdruck immer nur an den Geldwert, den es repräsentiert.“ (Arnold (1881: 383f.)).

71）Laum (1954: 90;107f.).

72）Du Cange (1883: 133).

73）この opificium の語源は、opus「作品、成果」+ facere「～を作る」である。よって語源的にも「生産活動」に該当するといえる。なお、この opificio は、英語の office「事務所、会社、営業所、職場」と同語源である（寺澤（1997: 982））。

74）瀬戸（2007: 5f.）.

75）瀬戸（2007: 5f.）.

76）例えば、Laum (1954: 75–80) の分析もこのプロセスに沿ったものである。

77）OED (2022); 寺澤（1997: 1353）.

78）OED (2022); 寺澤（1997: 1353）.

79）“Salted hay is much relished by all kinds of stock.” (1851 H. STEPHENS Bk. of Farm §4065 (1855) II. 240/1; Henry Stephens, The book of the farm, (another ed.), 1851 (1855)). (OED (2022)); 寺澤（1997: 1353）.

80）“He is forced to sell stock at a great loss.” (1780 R. B. SHERIDAN School for Scandal III. i. 29; Richard Brinsley B. Sheridan, The school for scandal, a comedy, 1780. Dublin) (OED (2022)); 寺澤（1997: 1353）.

81）OED (2022); 寺澤（1997: 1353）.

82）e.g. “A flock of sheep or a herd of cattle that, in a breeding country, is bought in, neither for labour, nor for sale, but in order to make a profit by their wool, by their milk, and by their increase, is a fixed

capital.” (Smith (1976: 280)); OED (2022); 寺澤（1997: 206）.

83）寺澤（1997: 206）. cattle と capital は、英語という同一言語における同語源語の関係にあり、これは二重語（doublet）とも呼ばれている。

84）e.g. “But when the demand rises beyond what this quantity can supply, when it becomes necessary to raise food on purpose for feeding and fattening hogs, in the same manner as for feeding and fattening other cattle, the price necessarily rises, and becomes proportionably either higher or lower than that of other butcher's-meat, according as the nature of the country, and the state of its agriculture, happen to render the feeding of hogs more or less expensive than that of other cattle.” (Smith (1976: 243)) このスミス『国富論』の文例のように、経済学研究には常に家畜が登場するものであり、家畜の経済学的な重要性を物語っている ; “Or any Tradesman in London, or in the Countrey, if he be able to hyre Land, or if he haue land of his owne, it is lawfull for him to graze, and afterwards to sell the Cattle he hath grazed aliue: therefore we trust, that which is allowed euery one of his Maiesties subiects, is not prohibited for vs to doe: so that we hope we may haue liberty to feed Oxen and Sheepe, and all other Cattle, and sell them aliue if we neede (keeping them so long as the Statute alloweth all men) otherwise, we should seeme Aliens and strangers (being barred of that liberty which is limited to euery one) and not his Maiesties subiects.” (Free Butchers of London (2008)); OED (2022); 寺澤（1997: 206）.

85）e.g. “Clerkes..spende the catayle of holy chyrche in other places at theyr owne wille.” (1387 J. Trevisa tr. R. Higden Polychron. vi. ix; John de Trevisa, Polychronicon Ranulphi Higden, tr. 1387 (Rolls series 1865–86))（現在では廃義）(OED (2022)); 寺澤（1997: 206）.

86）“Under the feudal system the application was confined to movable property or wealth, as being the only ‘personal’ property, and in English it was more and more identified with ‘beast held in possession, livestock’, which was almost the only use after 1500 ...” (OED (2022)).

87）“‘Cattle’ may become ‘property’, or conversely, and both meanings may be found in the same word or in the same group of cognates.” (Buck (1988: 143)); “The chief standard of value in the IE period and in the history of the IE-speaking peoples before the introduction of actual ‘money’ based on coinage was cattle (in the old wide sense ‘livestock’). This is amply attested for the several peoples by direct references and is also reflected in the interchange of ‘cattle’ with ‘property’ or ‘money’ in an inherited IE group and some others.” (Buck (1988: 773)).

88）ibid.

89）„Capitale bezeichnet aber nicht den Grund und Boden (fundus, terra), sondern ebenso, wie wenigstens anfangs auch pecunia, bezeichnet es gerade im Gegenteile nur den beweglichen Reichtum.“ (Hohoff (1918: 566)).

90）«Bestiaux, richesse mobiliaire antérieure même a la culture des terres: II est probable que les hommes ont presque partout commence a rassembler des troupeaux et a vivre de leur produit avant de se livrer au travail plus penible de la culture.» (Turgot (1766: 77)).

91）„Grund und Boden war anfangs nicht „schätzbar“.“ (Hohoff (1918: 565)).

92）“Agriculturae non student, maiorque pars eorum victus in lacte, caseo, carne consistit.” (Caesar (1914: 250)).

93）e.g. “pecua captiva praeter equos et mancipia praeter puberes virile secus et omnia, quae solo non continerentur, restituenda censuerunt dominis.” (Livius (1914b: 62)); “maxime circa Flumentanam portam, evertit. saxum ingens, sive imbribus seu motu terrae leniore, quam ut alioqui sentiretur, labefactatum in vicum Iugarium ex Capitolio procidit et multos oppressit. in agris passim inundatis

pecua ablata, villarum strages facta est.” (Livius (1914c: 270)).

94）“Inventis nonnullis civitatibus iureiurando inter se confirmant obsidibusque de pecunia cavent: Ambiorigem sibi societate et foedere adiungunt.” (Caesar (1914: 229)).

95）„... "Capitale" ist also ursprünglich völlig gleichbedeutend und identisch mit "pecunia"; beide bezeichnen in ganz gleicher Weise das eigentliche Vieh und das "Menschenvieh", das ist die Sklaven, die ... auch unter den Begriff pecunia subsumiert wurden. Beide Worte bedeuten ferner in gleicher Weise: Wert, Geld, mobiles Vermögen.“ (Hohoff (1918: 566)). capitāle と pecunia の意味の類似性は、Laum (1954: 79f.) などによっても指摘されている。

96）“Totum quidquid homines possident, ... pecunia vocatur; ideo autem pecunia vocata est, quia antiqui totum, quod habebant, in pecoribus habebant.” (Augustinus (1835: 114f.)).

97）e.g. “Besides what may be called the warehouse-rent above mentioned, each person, upon first opening an account with the bank, pays a fee of ten guilders;” (Smith (1976: 487)); “How extravagant soever the fees of counsellors at law may sometimes appear, their real retribution is never equal to this.” (Smith (1976: 123)); OED (2022); 寺澤（1997: 488）.

98）e.g. “Gif ðé becume óðres monnes giémeleás feoh [G and H] on hand” (L. Alf. 42; Th. i. 54, 9.) “if the stray cattle of another man come to thy hand” (Bosworth & Toller (2014)).

99）Buck (1988: 143).

100）e.g. “Eno thu bistu mera unsaremo fater Iacobe the dar gab uns den phuzi: her tranc fon imo inti sina suni inti sin fihu.” (Tatian (1892: 119); ANNIS Corpus Search (Deutsch Diachron Digital) (URL: https://korpling.german.hu-berlin.de/annis3/?id=06aa6f0c-7252–4e60-a8e5–199b73d0609e)); „Vieh ahd. fihu, mhd. vihe, indogermanisch (lat. pecū). ... Zunächst 1 kollektiv >dem Nutzen des Menschen dienende gezähmte Tiere< ...“ (Paul (2002))「人間の役に立つ飼い慣らされた動物」; „Vieh n. ‚Nutztiere der Haus- und Landwirtschaft‘, ... ahd. fihu ‚Nutzvieh, Tier, Besitz, Vermögen‘ (8. Jh.), mhd. vihe, vehe, (md.) vie, asächs. fehu ‚Vieh, Besitz‘, mnd. vē, mnl. nl. vee, aengl. feoh, fēo ‚Vieh, Besitz, Geld, Vermögen‘, anord. fē ‚Vieh, Besitz, Geld‘, schwed. fä ‚Vieh‘, got. faíhu ‚Geld‘ führt auf germ. *fehu, ... ie. *peku- ‚(Klein)vieh‘ angesetzt werden kann.“ (Pfeifer (1989)). „Nutztiere der Haus- und Landwirtschaft“「自家経済および農業に用いられる動物」= 家畜.

101）Buck (1988: 143); Pokorny (1959); Wartkins (2000); 寺澤（1997: 488）.

102）इत॑ चनि॒मन्यु॒मध्र॑जि॒स्त्वादा॑त॒मा प॒शुं ददे। (Rig Veda 5, 7, 10).「そのようにして私は富める者の悪しき意図を挫折させた。私は汝より授かりし家畜を所有する」（拙訳）URL: https://sanskrit-lexicon.github.io/rvlinks/rvhymns/rv05.007.html#rv05.007.10（最終閲覧日時：2022 年 8 月 22 日 23 時 03 分）; Buck (1988: 143).

103）„pek̂- to fleece; cattle, ‚Wolle oder Haare rupfen, zausen‘. peku- n. ... ‚das Geschorene, Wolltier, Schaf‘, dann ‚Kleinvieh, Vieh überhaupt‘; ‚Wolle, Fließ, auch Haar‘ ...“ (Pokorny (1959: 797)).

104）ibid.

105）“to fleece”「（羊）毛を刈る」の語源群と “cattle”「家畜」の語源群を同一の印欧語根 *pek̂- に遡求可能とする説は、Pfeifer（1989）のドイツ語語源辞典の Vieh の記述にも看取される。

106）Martin (2014: 14ff.).

107）“The second example is found among the savages upon the African coast of Angola, where there is no real money known. The inhabitants there reckon by macoutes; and in some places this denomination is subdivided into decimals, called pieces. One macoute is equal to ten pieces. This is just a scale of equal parts for estimating the trucks they make. If a sheep, e.g. be worth 10 macoutes, an ox may be worth

40, and a handful of gold dust 1000.“ (Steuart (1767: 531)).

108）Martin (2014: 8ff.; 28f.).

109）Martin (2014: 28–32).

110）“Money, which I call of account, is no more than an arbitrary scale of equal parts, invented for measuring the respective value of things vendible.” (Steuart (1767: 526)).

111）“Just so the unit in money can have no invariable determinate proportion to any part of value, that is to say, it cannot be fixed to perpetuity to any particular quantity of gold, silver, or any other commodity whatsoever.” (Steuart (1767: 527)); “That money, therefore, which constantly preserves an equal value, which poises itself, as it were, in a just equilibrium between the fluctuating proportion of the value of things, is the only permanent and equal scale, by which value can be measured.” (Steuart (1767: 530)); “Money, strictly and philosophically speaking, is, as has been said, an ideal scale of equal parts.” (Steuart (1767: 529)); “Symbolical or paper money is but a species of credit: it is no more than the measure by which credit is reckoned.” (Steuart (1767: 524)); “... Money of account, which I shall here call money, performs the same office with regard to the value of things, that degrees, minutes, seconds, & c. do with regard to angles, or as scales do to geographical maps, or to plans of any kind.” (Steuart (1767: 526)).

112）Martin (2014: 29).

113）Martin (2014: 31).

114）Martin (2014: 16; 32).

115）Martin (2014: 43).

116）瀬戸（2007: 5f.）.

117）Hohoff (1918: 557f.); „Ist das Geld ein lebendes Wesen, dann muss es natürlich als solches auch wachsen.“ (Hohoff (1918: 557)).

118）Hohoff (1918: 557).

119）„Die Griechen nannten bekanntlich den Zins „τοκος“, von τικτειν, gebären; die Römer ... sagten: das Geld "gebiert Zinsen", pecunia parit usuras.“ (Hohoff (1918: 558)).

120）Laum (1954: 90f.); Hohoff (1918: 562f.).

121）Laum (1954: 107f.).

122）Hohoff (1918: 568f.).

123）„Hier haben wir also das "arbeitende" oder "werbende" Geld, das heißt Geld oder Geldeswert ... , die im Handel angelegt sind und "Profit" bringen ohne irgendwelche Arbeit des Geldbesitzers, ...“ (Hohoff (1918: 570)); „Geld also, welches als Darlehen (mutuum) ausgeliehen müheloses Einkommen verschafft, oder welches in einem Gesellschaftsvertrage, und in Waren verwandelt oder investiert, aus sich selbst, ohne Arbeit des Eigentümers, Gewinn bringt, sich also scheinbar selbst verwertet oder vermehrt, ...“ (Hohoff (1918: 571)).

124）„ ... diese Wertsummen, die dem Eigentümer so ein arbeitsloses Einkommen verschaffen, werden hier Kapital genannt (Handelskapital, Warenkapital).“ (Hohoff (1918: 570)).

125）なお、Hohoff（1918）によれば、こうした自然増殖をモチーフとする貨幣観（τα χρηματα ενεργα ποιειν）は、古代ギリシア・ローマの自由民における労働による利得からの忌避的傾向に起因するという。“Gelderwerb durch eigene persönliche Arbeit galt den Griechen wie Römern für schimpflich und des freien, vornehmen Mannes unwürdig. Daher sagten die Waren und Geldhändler und die Fabrikbesitzer nicht, dass sie selbst arbeiteten und durch ihre Arbeit den Gewinn erzeugten, sondern

sie ließen ihr Geld "arbeiten", und der Gewinn galt ihnen als "Frucht" ihres Geldes. "τα χρηματα ενεργα ποιειν" nannte man das.“ (Hohoff (1918: 561f.)).

126）„Geld also ... wird im 11. bis 14. Jahrhundert in Italien Capitale genannt, zunächst nur von der Geschäftswelt, später allmählich auch von den Gelehrten.“ (Hohoff (1918: 571)).

127）„Der "Profit" erscheint also als eine Zunahme, ein Wachstum und eine Wirkung des "Kapitals", des in einem Handelsgeschäft angelegten Geldes.“ (Hohoff (1918: 570)).

128）Marx (1867: 115f.). なお、類似する例としては、印欧語族において、Zinsen「利子」を動植物の成長として表現していたというものもある（Schrader (1901: 996f.)）。

129）これと類似することとして、Barnes（2006）は、マルクス主義経済学が生物学的メタファーを多用しているということを指摘している。McCloskey（1983: 507）の指摘するように、メタファー表現の重要性は、マルクス主義経済学に限らず、経済学全体にわたる様々な記述において重要な役割を果たしている。また、Neale（2018）は、Keynes や Hayek などの経済学者が概念メタファーを使用しているということを指摘している。

130）宇野（2016: 94）.

131）宇野（2016: 48f.）.

132）„In Deutschland heißt diese Kapitaleinlage "hovetstol", Hauptstuhl, im Gegensatz zur "wynnynge", dem Gewinn.“ (Hohoff (1918: 574)); Schmidt (1883: 53).

133）„Capital: Eine Summe Geldes, soweit sie dazu bestimmt ist, Gewinn zu bringen, im Gegensatze dieses Gewinnes oder der Interessen; der Hauptstamm, das Hauptgeld, das Hauptgut, der Hauptstuhl ...“ (Adelung (1793: 1303)).「金額の総体。利益をもたらすことが定められている限り、これらの利益あるいは利子に対する元本、元金、主要な財産」

134）瀬戸（2007: 5f.）.

参考文献

宇野弘蔵（2016）『経済原論』岩波書店.

太田至（2002）「家畜の個体性と商品化 ── 東アフリカの牧畜民は資本主義者か ── 」『アジア・アフリカ地域研究』第 2 号、pp. 306–317（京都大学アジア・アフリカ地域研究科）.

瀬戸賢一（2007）『英語多義ネットワーク辞典』小学館.

寺澤芳雄（1997）『英語語源辞典』研究社.

中川洋一郎（2017a）『新ヨーロッパ経済史Ⅰ　牧夫・イヌ・ヒツジ』学文社.

中川洋一郎（2017b）『新ヨーロッパ経済史Ⅱ　資本・市場・石炭』学文社.

Neale, M. (2018)「日欧経済学者の概念メタファー使用の比較」（『大阪大学言語文化共同研究プロジェクト 2017』, pp. 57–64.）.

Adelung, J. (1793) *Grammatisch-kritisches Wörterbuch der hochdeutschen Mundart*, Leipzig: J. G. I. Breitkopf, Sohn und Compagnie.

Arnold, W. (1868) *Kultur und Recht der Römer*, Berlin: Dümmler’s Verlagsbuchhandlung.

Arnold, W. (1881) *Deutsche Urzeit*, Gotha: F.A. Perthes.

Augustinus, A. (1835) *Sancti Aurelii Augustini Hipponensis Episcopi Operum, Pars V., Opera Moralia*, Paris: Parent-Desbarem.

Barnes, T. J. (2006) Reading the Texts of Economic Geography: The Role of Physical and Biological Metaphors, in: *Writing Worlds Discourse, text and metaphor in the representation of landscape*, edited by

Trevor J. Barnes and James S. Duncan, London; New York: Routledge Taylor & Francis Group.

Benveniste, É. (1969) *Le vocabulaire des institutions indo-européennes 1. économie, parenté, société,* Paris: Minuit.（『インド・ヨーロッパ諸制度語彙集Ⅰ　経済・親族・社会』前田耕作監訳，言叢社）.

Böhm-Bawerk, E. v. (1891) *The Positive Theory of Capital*, London; New York: Macmillan and Co.

Buck, C. D. (1988) *A dictionary of selected synonyms in the principal Indo-European languages*, Chicago: University of Chicago Press.

Du Cange, C. (1883) *Glossarium mediæ et infimæ latinitatis,* Tomus 2, Niort: L. Favre.

Columella, L. (1829) *Scriptores rei rusticae*, Torino: J. Pomb.

Engels, F. (1886) *Der Ursprung der Familie des Privateigenthums und des Staats*, Stuttgart: J.H.W. Dietz.

le groupe μ (1970) *Rhétorique Générale*, Paris: Larousse.

Gutiérrez Cuadrado, J. & M. Bargalló et al. (1996) *Diccionario Salamanca de la lengua española*, Madrid; Salamanca: Santillana, Universidad de Salamanca.

Heusler, A. (1885) *Institutionen des deutschen Privatrechts*, Leipzig: Duncker & Humblot.

Hohoff, W. (1918) Zur Geschichte des Wortes und Begriffes „Kapital“. In: *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 14. Bd., H. 4, 554–574, Franz Steiner Verlag.

Knies, C. (1873) *Geld und Credit*, Berlin: Weidmannsche Buchhandlung.

Küspert, O. (1903) Über Bedeutung und Gebrauch des Wortes ‚caput‘ im älteren Latein — Eine lexikalisch-semasiologische Untersuchung. In: *Programm des K. humanistischen Gymnasiums in Hof für das Schuljahr 1902 /1903*, Mintzel'schen Buchdruckerei in Hof.

Lamprecht, K. (1885) *Deutsches Wirtschaftsleben im Mittelalter*, Leipzig: A. Dürr.

Laum, B. (1954) Über Ursprung und Frühgeschichte des Begriffes „Kapital“. In: *FinanzArchiv / Public Finance Analysis*, New Series, Bd. 15, H. 1, 72–112, Mohr Siebeck GmbH & Co. KG.

Lewis, C. T. & C. Short (1879) *A Latin dictionary: founded on Andrews' edition of Freund's Latin dictionary*, revised, enlarged, and in great part rewritten by Charlton T. Lewis and Charles Short, Oxford: Clarendon Press.

Martin, F. (2014) *Money: The Unauthorized Biography*, New York: A.A. Knopf.（『21 世紀の貨幣論』遠藤真美訳、東洋経済新報社）.

Marx, K. (1867) *Das Kapital. Kritik der politischen Oekonomie*, Hamburg: Verlag von Otto Meissner.

McCloskey, D. N. (1983) The Rhetoric of Economics, in: *Journal of Economic Literature*, Vol. 21, No. 2 (Jun., 1983), pp. 481–517, American Economic Association.

Nerlich, B. & D. D. Clarke (1999) Synecdoche as a Cognitive and Communicative Strategy. In: Blank, Andreas. & Koch, Peter. (eds.), *Historical Semantics and Cognition*, 197–214. Berlin and New York: Mouton de Gruyter.

Paul, H. (2002) *Deutsches Wörterbuch: Bedeutungsgeschichte und Aufbau unseres Wortschatzes*, Tübingen: Max Niemeyer Verlag.

Pfeifer, W. (1989) *Etymologisches Wörterbuch des Deutschen*, Berlin: Akademie-Verlag.

Pianigiani, O. (1907) *Vocabolario etimologico della lingua italiana*, Roma; Milano: Società editrice Dante Alighieri di A. Segati.

Pokorny, J. (1959) *Indogermanisches etymologisches Wörterbuch*, Bern; München: Francke Verlag.

Radden, Günter & Zoltán Kövecses. 1999. Towards a Theory of Metonymy. In: Panther, Klaus-Uwe, and Günter Radden. (eds.), *Metonymy in Language and Thought*, 17–30. Amsterdam: John Benjamins.

Rey, A. (2010) *Dictionnaire Historique de la langue française*, Paris: Le Robert.

Salvioli, G. (1912) *Der Kapitalismus im Altertum. Studien über die römische Wirtschaftsgeschichte*, Stuttgart: Dietz GmbH.

Saussure, F. (1916) *Cours de linguistique générale*, Paris : Editions Payot & Rivages.

Schmidt, F. (1883) *Handelsgesellschaften in den deutschen Stadtrechtsquellen des Mittelalters*, Breslau: W. Koebner.

Schneider, H. K. (1981) Livestock as Food and Money. In: J. Galaty et.al. (eds.), *The Future of Pastoral Peoples*. Ottawa: International Development Research Center, 210–223.

Schrader, O. (1901) *Reallexicon der indogermanischen Altertumskunde: Grundzüge einer Kultur- und Völkergeschichte Alteuropas*, Strassburg: K.J. Trübner.

Seto, K. (1999) Distinguishing Metonymy from Synecdoche. In: Panther, Klaus-Uwe, and Günter Radden. (eds.), *Metonymy in Language and Thought*, 91–120. Amsterdam: John Benjamins.

Smith, Adam (1976) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, Indianapolis: Liberty Fund.（『国富論』高哲男訳、講談社）.

Spencer, P. (1990) Pastoralism and the Dynamics of Family Enterprise. In: C. Salzman and J. Galaty, (eds.), *Nomads in a Changing World*. Naples: Institute Universitario Orientale, 211–231.

Steuart, J. (1767) *An Inquiry into the Principles of Political Oeconomy: Being an Essay on the Science of Domestic Policy in Free Nations*, Vol.1, London: A. Millar & T. Cadell.（『経済学原理』中野正訳、岩波書店）.

Suzuki, M. (2021) An Acceptable Classification of Metonymy and Synecdoche: A WordNet-Driven Approach. In: *Papers in Linguistic Science*, Kyoto: Kyoto University, Vol. 27, 81–110.

Tacitus, C. (1878) *Cornelii Taciti De origine et situ Germanorum : liber*, Leipzig : B. G. Teubner.

Turgot, A.-R.-J. (1766) *Réflexions sur la formation et la distribution des richesses*, M. Turgot.

de Vaan, M. (2008) *Etymological Dictionary of Latin and the other Italic Languages*, Leiden; Boston: Brill.

Wagner, P. F. (1878) *Lexicon Latinum*, Bruges: Documenta Omnia Catholica.

Watkins, C. (2000) *The American heritage dictionary of Indo-European roots*, Boston: Houghton Mifflin.

Weber, M. (1889) *Zur Geschichte der Handelsgesellschaften im Mittelalter*, Stuttgart: F. Enke.

Weber, M. (1891) *Die römische Agrargeschichte in ihrer Bedeutung für das Staats- und Privatrecht*, Stuttgart: F. Enke.

Zalizniak, A. et al. (2012) The catalogue of semantic shifts as a database for lexical semantic typology. *Linguistics*, 50(3), 633–669.

テキスト

Caesar, C. I. (1914) *C. Iuli Caesaris Commentarii rerum in Gallia gestarum VII*, Oxford: Clarendon Press.

Cato, M. P. & M. T. Varro (1934) *Marcus Porcius Cato on agriculture; Marcus Terentius Varro on agriculture*, London,Cambridge, Mass: W. Heinemann, Harvard University Press.

Lisle, E. (1757) *Observations in husbandry*, London: J. Hughs.

Livius, T. (1914a) *Titi Livi Ab vrbe condita Tomvs II*, Oxford: Clarendon Press.

Livius, T. (1914b) *Titi Livi Ab vrbe condita Tomvs IV*, Oxford: Clarendon Press.

Livius, T. (1914c) *Titi Livi Ab vrbe condita Tomvs V*, Oxford: Clarendon Press.

Morton, J. (1853) *The Ancren Riwle; a treatise on the rules and duties of monastic life.*, London: J. B. Nichols and sons.

Reiffenstein, I. (Hg.) (1962) *Winsbeckische Gedichte nebst Tirol und Fridebrant*, hg. von Albert Leitzmann.

Dritte, neubearbeitete Auflage (Altdeutsche Textbibliothek 9), Tübingen: Max Niemeyer.
Tatian (1892) *Tatian: Lateinisch und altdeutsch*, Paderborn: Ferdinand Schöningh.
Vergilius Maro, P. (1876) *Publii Virgilii Maronis Aeneis*, Quedlinburg: Gottfried Wilhelm.

辞書項目記述内容参照 URL

"capital, adj. and n.2". OED Online. June 2022. Oxford University Press. https://www.oed.com/view/Entry/27450?rskey=hDqjx2&result=2&isAdvanced=false (accessed August 18, 2022).
"cattle, n.". OED Online. June 2022. Oxford University Press. https://www.oed.com/view/Entry/29037?redirectedFrom=cattle (accessed August 18, 2022).
"fee, n.2". OED Online. June 2022. Oxford University Press. https://www.oed.com/view/Entry/68943?rskey=YXA0na&result=2&isAdvanced=false (accessed August 18, 2022).
"fee, n.1". OED Online. June 2022. Oxford University Press. https://www.oed.com/view/Entry/68942?rskey=YXA0na&result=1&isAdvanced=false (accessed August 18, 2022).
"principal, adj., n., and adv.". OED Online. June 2022. Oxford University Press. https://www.oed.com/viewdictionaryentry/Entry/151442 (accessed August 25, 2022).
"stock, n.1 and adj.". OED Online. June 2022. Oxford University Press. https://www.oed.com/view/Entry/190595?rskey=c5e5sZ&result=1&isAdvanced=false (accessed August 26, 2022).
Bosworth, J., 2014. FEOH. In T. Northcote Toller, C. Sean, & O. Tichy, eds. An Anglo-Saxon Dictionary Online. Prague: Faculty of Arts, Charles University. Available at: https://bosworthtoller.com/10322
Middle English Dictionary. Ed. Robert E. Lewis, et al. Ann Arbor: University of Michigan Press, 1952–2001. Online edition in Middle English Compendium. Ed. Frances McSparran, et al.. Ann Arbor: University of Michigan Library, 2000–2018. <http://quod.lib.umich.edu/m/middle-english-dictionary/>. Accessed 21 August 2022.https://quod.lib.umich.edu/m/middle-english-dictionary/dictionary/MED6727/track?counter=3&search_id=18941588

テキスト等参照 URL

Charleton, Walter, 1619–1707., 2004, Natural history of nutrition, life, and voluntary motion containing all the new discoveries of anatomist's and most probable opinions of physicians, concerning the oeconomie of human nature : methodically delivered in exercitations physico-anatomical / by Walt. Charlton ..., Oxford Text Archive, http://hdl.handle.net/20.500.12024/A32704.
Free Butchers of London., 2008, Reasons tendred by the Free Butchers of London against the bill in Parliament to restraine butchers from grazing of cattle, Oxford Text Archive, http://hdl.handle.net/20.500.12024/A06282.
Scott, William, b. 1726. and North, Frederick, Lord, 1732–1792, dedicatee., 2008, O tempora! O mores! Or The best new-year's gift for a prime minister. Being the substance of two sermons preached at a few small churches only, and published at the repeated request of the congregations, / by the Rev. William

Scott, M.A. late scholar of Eaton.; Dedicated to Lord North. ; The pulpit was refused at eight of the most capital churches in London., Oxford Text Archive, http://hdl.handle.net/20.500.12024/N10728.